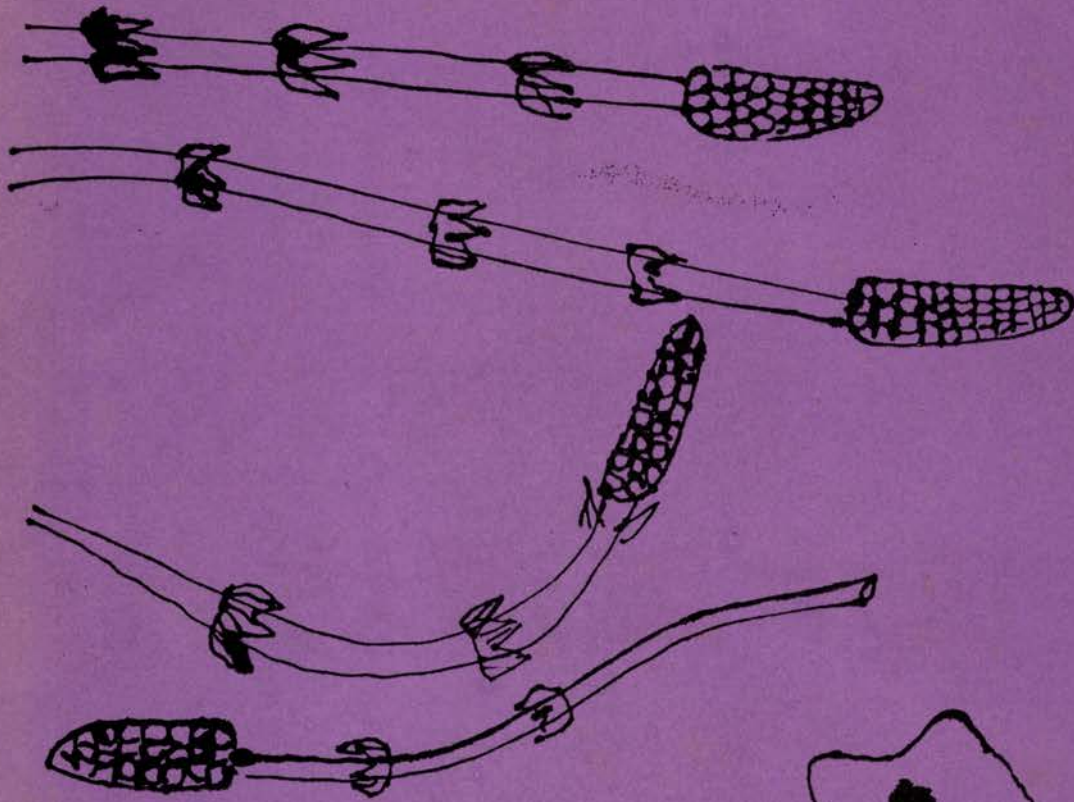


証の雑柳川



麻生路郎☆主宰

四月号



no. 419

No. 419 Pensoj flugas trans la land-limon THE SENRYU ZASSHI

川柳雑誌社主催

本社四月句会

5月本社句会

兼題
美名
駅
十字架
半分

★千日前の会場が大好評です。
ゆっくり土曜日の夜は作句でくつろぎましょう。

日時 四月七日(土)午後六時

会場 自安寺 (211) 一四七八番

大阪市南区千日前電停東ノ北側

兼題 「家出」(三首) 麻生路郎選

(路郎選に限り七時半切)

「声優」(三首) 正木水客選

「心臓」(三首) 真鍋一瓢選

「求人」(三首) 菊田いさむ選

席題 三題(当日発表)

柳話 川村好郎

呈賞 ☆各題天位・☆各題天位から路郎選により不朽

潤賞

会費 百円

幹事 葉香・淡舟・いさむ・潮花・文秋・庸佑・狂二

・与呂志・白水・水洞・すくむ・眞風子・柳去
子・舟遊・一三夫

★投句だけの方は郵券三十円

同封(切四月五日)

大阪市住吉区万代西五丁目廿五番地

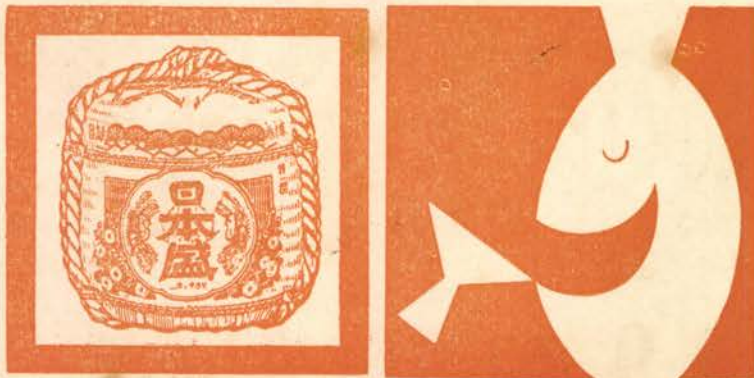
川柳雑誌社句会部

電・大阪神六〇八一

日本盛酒坊

和やかに 一杯

東京酒坊・八重洲口名店街
大阪酒坊・御堂筋道頓堀橋南詰



灘の清酒
二六
ンサカリ

不朽洞句帖

麻生路郎



船場のぼんち(四句)

ぼんちとの鞘当丁稚哀れなり
初恋は年増だったとぼんち云う
祭将棋ぼんちの相手さされて居
ぼんちもう金に詰った姿見せ
社長まだ若さを誇る自家用車
二号郎の方が政治の電話なり
首相攻撃一番無難で面白し
停年退職鉢植提げて帰って来
僕と缺ともに切れ味わるくなり
欲も老いたか一つ一つを捨てはじめ

川柳雑誌四月号目次

題字……麻生路郎・表紙……野尻弘

不朽洞句帖……………麻生路郎…(3)

妻妾茶ばなし……………東野大八…(16)

私の見たハワイ……………若本多久志…(26)

ドナテロの少女……………麻生路郎…(18)

特集「花いっぱい」

小西無鬼・田中鳥雀・工藤甲吉・那谷光郎・宮口笛生……………(12)

みち……………戸田古方…(32)

名句と難句……………麻生路郎…(4)

あの年この年四月号雑感……………(31)

春日局……………富士野鞍馬…(30)

★現代柳人録……………(20)

★川柳書架……………(38)

句評リレー

いわを・佐保蘭・柳児・三司・六花……………(30)

落語に顔を出す川柳……………不二田一三夫…(38)

★不朽洞の人々……千容氏の巻(37)……………★川柳まつり予告……………(39)

大万川柳ベスト・10決定……………(40)

★川柳家戸籍調べに掲載された芳名録(18)……………★短冊頒布会……山路閑古……………(19)

川柳塔……………麻生路郎選…(6)

同舟近詠……………諸家……………(11)

近作柳檣……………麻生路郎選……………(20)

金泥集……………北川春巢選……………(40)

各地柳壇……………麻生路郎選……………(41)

★柳界展望……………(36)

★不朽洞会から……………(37)

一路集

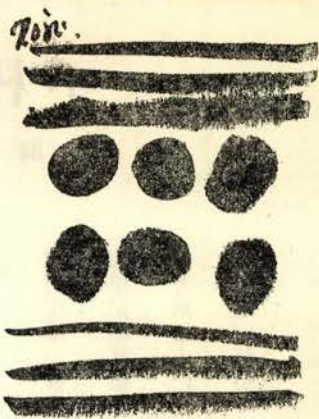
「手酌」……………西尾采選……………(37)

「同棲」……………田中鳥雀選……………(34)

「化粧」……………山川阿茶選……………(35)

★柳檣室……………(46)

▼パンの散歩……………(46)



川柳 名句と難句

麻生路郎

つべきか、それとも校門を去るか、木馬に腰をおろして、暮れゆく夕陽を浴びて思ひなやんでいるさまを巧みに描出していると思う。

【二九六】

ことぎれしあと降りつのるトタン屋根 (塚子)

「医者が、ご臨終です」

と云って、立ち去ったあとのしずけさは格別である。そこへ、耳朶を打つものは、降りつのである。トタン屋根の音ばかりだったと詠んだのである。心の底まで、冷え冷えとした雨がしみこんで来るような句である。

【二九七】

もろて来たものまで母に売る気なり (文秋)

今どきの娘の子は、何んでもすぐに割切ると云われるが、たしかに、そうした傾向がうかがわれる。その点、男の子より女の子の方が強いらしい。

「お母アちゃん、コレ買うて」

と投げ出したのは勤務先から、もらったものだ。

「あなた、それ貰って来たんやないか」と云っても、

「そうよ。だから買うて欲しいの。コレ売ってレジャーに行くつもり」

【二九八】

台風に負けるものかとまた建てた

【二九二】
恋ならん一ツハンガーに重ねあい (左文字)

この心理、この情景は、恋に経験を持たない人々にはハッキリとつかめないかも知れないが、一度恋した人には、ハタと膝を打つ、恋ごろなのである。

外にまだハンガーがない訳でないのに、同じハンガーの上に、自分のものをフアリと、おっかぶせて掛ける、そうした微妙な恋ごろを巧みにとらえていると思う。

下五の「重ねあい」が、情景から、心のうごきまで、うかみあがらせている。この場合、女性の方は、こころひそかに、「アテ」と云って、少し顔を赤らませたことであろう。

【二九二】

キッスクらいは肉体と想うてず (春巢)

映画では、キッスどころか、組んずはく

れつして見せる。今時の女性は、そうしたことに馴れっこになっているので、それ等

のものが肉体の一部の行為であり、結婚の時期までは、その清純さを保って行かないければならないものだと考えていないようである。

【二九三】

ハマヤラワまでつぶやいて広辞林 (弦太朗)

明治生れの私たちにとっては、思わず微笑を禁ずることの出来ない句だ。辞書をひくのに、五十音よりは和英辞書のABC順の方がズッと便利で早い私たちであるから。

私たちは広辞林から、目的の字がどの辺にあるかを知るのに、アカサタナ、ハマヤラワを何べんか繰り返さねばならないのだ。殊に、真ん中より後部の場合には、この句にあるように、ハ、マ、ヤ、ラ、ワを

真面目くさった顔をして、つぶやくように、何べんか繰り返すのである。作者も、

おそらくその一人なのであろう。「つぶやいて」の中五がよく利いている。

【二九四】

父と娘でベレー換えっこして出かけ (ひか平)

どことなく春らしい感じが出ていると思ふ。父と娘が、まるで友達のような親しみを持って、出かけているように思えて嬉しい句だ。この場合、とり換えっこしたのがベレー帽であることも動かない。

【二九五】

駈変るべきか木馬に腰おろし (清生)

若い先生の職域の悩みと見るべきか。いづつの間にか組合運動の役員に押し上げられ、鉢巻をしてベースアップの先陣をうけたまわってはいれるもの、それは自分の本意でもないし、性質にもあわないのである。本来の使命が教鞭をとるにあることを

思うと、鉢巻姿の自分を学童の眼前にさらしたくはない。このまま隠忍して時期を待

(きんぎょ)

台風でベシヤンコになったが、いつの間
にやら、元のところに、倒れた家よりも、
もっと立派な家が建ちならんでいる。それ
を

「負けるものかとまた建てた」と観たので
ある。人間の力が、どこまで続くか。面白
い観方の句だ。

〔二九九〕

働だけが来たが科学にもう勝てず

(圭井堂)

これまでは、何事によらずカンを働かし
て来たが、近ごろでは、核がどうの斯うの
と云う世の中になったので、科学には対抗
出来なくなると、老人がサジを投げたこ
とを詠んだもの。

しかし、まだまだ科学では割り切れぬも
のも、ないことはない、多少の未練をは
のめかしているような句だ。

〔三〇〇〕

値上りをせぬのは亭主ばかりにて

(甲吉)

近ごろは、アレも値上り、コレも値上り
で、値上りのシーソーゲームを見せられて
いるようだが、値上りせぬのは亭主ばかり
だという、自嘲の句である。

亭主たるもの「サッパリ、ワヤでござり
ます」と云うアチャコの言葉、そのまま借
用して、首をすくめるより手がないのでは
なからうか。なげかわしきかぎりではあ
る。

〔三〇一〕

地図と一緒に夢を疊めり

(薫風子)

毎日毎日、同じことを繰り返している
生活には飽き飽きする。

「一べん、旅へでも出て見よう」

と、地図をひろげて見る。行きたいところ
はあっても、そこまで行くと一週間はかか
る。残念ながら、それだけの休暇はとれな
い。それに旅費の方もいささか心細い。ま
たの機会を待つより仕方がないと、せっか
くの夢も、「地図と一緒に」畳みこんでし
まったと云うのである。

〔三〇二〕

も一人の俺がしきりに吼えたり

(晃)

私は商売人だ。人の顔を見れば「毎度大
きに」と云っている。少々変なことを云わ
れても、「エへへへ」ですましている。ま
ことになさげない話だ。

しかし、私の心の中には、「も一人の俺
が」がいて「同じ人間じゃないか。そんな
ことを云われて、黙っているとは、何と云
う不甲斐ない男だ。男なら男らしく、云い
たいことは堂々と云え」と、けしかけられ
ると云うのである。

この句は誰の心のうちにもひそんでい
る、も一人の自分を押えて生き抜くことの
むずかしさを詠んだものであるが、自己嫌

悪の句だとも云える。

〔三〇三〕

一票をねだる年賀カルビもつけ

(柳志)

常日頃は、そこにいるかとも云わぬ男か
ら、年賀状が来た。見れば名前に振り仮名
がついているので、

「ハハーン。票乞食か」

と思つたと云うのである。この句、「ルビ
もつけ」がヤマである。

〔三〇四〕

右左なくて軍手の気らくなり

(遠二)

乃木將軍は、くらがりてハネ起きても、
スッポリと、靴が履けるように、左右のな
い靴を注文して履いていられたそうだが、
軍手と云う、しろものも、右左のない、ぶ
さいく姿をしていたが、くらがりて、ど
ちらの手へはめても、いっこう差しつかえ
る。

乃木將軍は、くらがりてハネ起きても、
スッポリと、靴が履けるように、左右のな
い靴を注文して履いていられたそうだが、
軍手と云う、しろものも、右左のない、ぶ
さいく姿をしていたが、くらがりて、ど
ちらの手へはめても、いっこう差しつかえ
る。

〔三〇五〕

本願寺へ溜れば煤も拜まれる

(八九寸)

本願寺にかぎらず、古いお寺はいちよう
に、ご本尊が煤けている。その方が信者に
とっては、かえってありがた味が増すの
も知れない。「溜れば煤も拜まれる」とは
観光に出かけた人の皮肉な観方だと云え
う。

〔三〇六〕

おさしみの垂れを気にする借衣裳

(知恵美)

女の気持ちは微妙だ。結婚式が何かに招
かれても、まずアタマに来るのは衣裳のこ
とだ。是非行かねば義理が果たせないとな
ると借衣裳をする。この句はそうした女性
のこまかな心のうごきを巧みにとらえてい
る。



ビールは
楽しいものです
人の心を
明るくします
和やかな
雰囲気をつくります

ビールは
アサヒ



川柳塔

大阪市 正本水客

老人の誕生日過ぎてから気付き

寒耐のうごけば濁るほどの水

堺市 吉田圭井堂

筆不精をみとめて貰う年になり

老眼を替える予算も飲んじまい

晩く帰れば僕の場所に長男がいる

ハイヒール故郷の山坂けわし過ぎ

木に竹を継いだ祝詞を無事終る

どう見ても銘柄らしい子が居らず

大阪府 西 いわを

貧乏人言われぬ前から麦ばかり

裸婦のポーズの荒っぽさにどぎまぎし

下関市 国 弘 半 休

忙しいと云われて恋はさめかかり

歌おうかローカル線の終列車

冷やかにされればされるほどつものり

さし向い阿呆らしゅうて仲居逃げ

素面ではじょう談一ツ云えぬ人

靴下の柄も公務員でなくなった

大阪市 北 川 春 渠

聖地参拝先生までがへきえきし

見出しだけ読むに新聞二つとり

防府市 長 野 井 蛙

持てる人はPTAへ着換えせず

働らく者の味方というて働らかず

市議員補欠選挙

放射能満れて行こうと洒落とれず

市議補選議員の虫の多いこと

わが道を行く十代で手におえず

ホノルル 築山快夢起

岡山県 直原七面山

寄る齡に納骨堂の値も調べ

元旦の計へ女房がケチをつけ

情熱は消炭ほどがまだ残り

男みな汚く見えて恋を得ず

モデル住宅せめて椅子なとかけたるか

鳥取市 河村日満

道問えばあごで方角教えられ

名勝を足下に放尿まだ続き

知りもせぬくせに小癩なピカソ論

黄ナンバーでしばし社長車会長車

ワイマル 羽佐間柳葉

お茶も出さんのかと帳場へ取る受話器

教養は酒に飲まれぬ人になり

豊中市 足立春雄

抵抗のアルサロ出血のバチンコ屋

金貯めりゃ鼻息までが荒くなる

ハワイ紀行

西宮市 若本多久志

大阪市 市場没食子

樺原市 上田翠光

ふたことめには金々と父も老い

インスタント時代だ煮メ買いい出る

することはしたると云うが粗品にて

日本人ですかと握手求められ

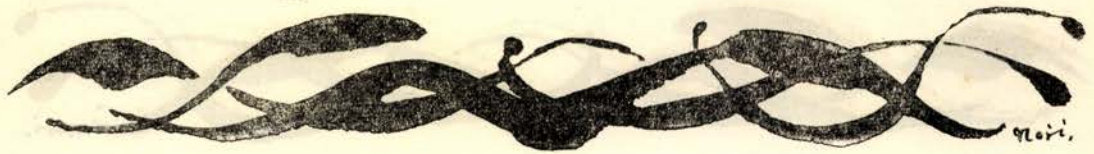
三千海里離れて朝の海苔茶漬

お土産を選べばこれもジャパン製

懐しやヤシの木の間に同じ月

本願寺出雲大社もあるハワイ

大阪市 松江梅里



恐ろしき男の子なら産むという

大詰の雪も汚れて楽となり

口程に癌のこわさは割りきれず

倉敷市 木村 千容

長距離へ老化の耳を押しあてる

人人をあてにしすぎて腹を立て

わがほこり台なしにせり盗作奴

井の章の波紋僕へもインタビュ

大阪市 木村 水洞

これからの暮しを喪服胸に秘め

薬局に顔知られる更年期

大阪市 真鍋 一瓢

女菩薩が特売場へ出でませり

ホステスは水方円にしたがう気

大阪市 後藤 梅志

梅咲くやここにも派手な分譲地

文芸倶楽部とはなつかしや古木屋

米子市 小西 雄々

功成つてアンバランスの妻に見え

上向いて青信号でも歩けぬ世

冬山で特攻隊のように死に

退職金弾いていたに頓死をし

大阪市 山川 阿茶

戦争がなけりゃ交通事故で死に

住吉のお芋の話年が知れ

珊瑚郎氏病む

見舞客へお酒の呑めぬ話なり

大阪市 金井 文秋

美智子妃の脇役でいる皇太子

上の子の不具が哀れとあと産まず

窮すれば通ず税務署に強くなり

加賀市 那谷 光郎

すぐ書ける返事も出さず基に耽り

恐妻のせめてアバンで居たい旅

旅からの父の絵ハガキ二三行

恋誕生恋の破局もこのベンチ

下関市 桜川 不水

ルンベンの腹を突刺す冬の屋

捕りきれぬみの虫一つ冬を越し

増える伸びる株じゃござんせぬ孫のこと

着ぶくれて腹が減らない長火鉢

こんなのもあつた袂の一銭貨

岡山市 浜田 久米雄

栄転は電話が一つついただけ

老骨の身へ鞭打って左遷行く

挨拶へ左遷ぶつぶつと去に

出雲市 尼 緑之助

農研会都会讚美もして別れ

食卓の変化テレビにおだてられ

密殺の豚旧正を派手にする

大阪市 水谷 竹荘

地下鉄とバスに別れる共稼ぎ

ハイボール女も誘惑されたい気

歌舞伎座にて

旦那とは別に見ている指定席

尼崎市 小林 文月

甥の結婚を祝つて

贈られし目覚時計憎し夜明け前

満員になつてもBG編んでおり

東京都 山根 白星

殺意ふと薊へ視線止めしとき

みちのくは雪だと知つた石炭車

引き金を擬されてスターダムに乗り

凶器にもなる腰紐のまぶし過ぎ

鳥籠へガス屋の世辞もい日中

ヒューズさえ直せず原稿紙に生きる

奈良県 飯降 白香

遊びにもパーティなど幼児園

化粧した爪にダイヤの指妖し



おごられたわけがわかって後悔し

岡山県 福 島 鉄 児

帰郷三日もうあきました荷ごしらえ

返事出来ぬのに歯科医よく話し

薬つかむ思いで来たに戸が閉り

岡山市 服部 十九平

外来が跡絶えてナース爪をきり

西宮市 若 林 草 右

きけばわかる筈のパン屋が公休日

大根の高値は菜っぱも捨てさせず

赤チンも用意に入れた道具箱

広島県 山 田 季 賛

ラッシュアワー思わぬ人の後に居

貧しさえまだまだ去らぬこの寒さ

大雪が故郷静かにさせている

岡山県 田 村 藤 波

ほんものの信心地下足袋強く踏み

古辞引とおれの命の根くらべ

妻はまだ知らんと思うていた不覚

見島市 本 田 恵 二 朗

経を読むたどたしさへ遺影笑む

求人難将より馬が口説かれる

京都市 松 川 杜 的

トランジスター何処を廻しても九と橋

鳥取市 森 本 法 泉 子

正月の口笛坂本九で行く

増築に応接セット置く所

吹田市 橋 本 幸 男

妻にない魅力初めてバーで知り

運勢がどうあろうとも遊ぶ気の

堺 市 高 崎 雄 声

雄凶空しく停年後の中風

世の移り下駄を履くことの久しけれ

遠慮も妥協も齢やなと思ひ

五尺八寸おかねの前に膝まずき

島根県 藤 井 明 朗

貧乏性日曜じっとして居れず

独占はしたし男の浮気性

岡山県 永 松 東 岸

ビニールの中で春菊遅々と伸び

子の勉強見て安心をしてねむり

へそくりで買ってもらったウイスキー

倉敷市 野 田 素 身 郎

役付にはほど遠いのに禿げはじめ

社長室の花も萎れた金語り

大阪市 清 水 望 峰

今日も暮れる金の包みも拾わずに

立飲み屋へ背中を押しした空っ風

大阪市 木 村 十 悟

継ぎ当てて着る世じゃないと子が叱り

高校を出せば農家に居て呉れず

大阪市 伊 達 堰 子

甘党の件で先を案じとり

ハネムーンの便り教えた宿に居ず

西の京暮れる氷雨のひとしきり

尼崎市 坂 田 東 洋 男

酒飲みが改札口を罷り出る

じっとして居ても車外に出してくれ

大阪市 不 二 田 一 三 夫

処女という魅力も三十までのこと

石庭せいていの好きな女で胸を病み

小金貯め老婆は三面寒く読み

金を貸す力がないので腕を貸し

兵庫県 酒 井 ひ か 平

砂を踏む音へ尼僧は襟を立て

長生きをする気丹波で住むと決め

芦屋市 丸 川 初 甫

本心を芸者ワルツで試めされる

老妻の不精口だけ達者なり



便箋七枚一口で済む話

六段へ晴着の袖が軽くゆれ

唐津市 新岡回天子

もしもしと橋の話から呼ぶ魔窟

何もかも捧げる化粧かひまをとり

岡山県 池田古心

趣味多し孫は嫌いとい口走り

百姓の本家は段々小そうなり

骨董の趣味が商売人にする

大阪府 早川清生

出稼ぎの閑半日を普請見る

スキー歴五年を聞けば五日なり

油の海へテープも力尽きて落ち

仲居して言葉少なき妻となる

耕され尽した感じ後妻くる

無医村へ医者がかきて病人をつくる

堺市 辻圭水

死亡ゼロ別に喜ぶことなし

きれい好きほこりの中で生きる職

西宮市 小浜牧人

満はたち父の代理を言いつかり

スピードを出すのが自慢のヘルメット

薫風子君へ

初旅で子を洗うてやる家族風呂

池田市 前川左文字

弱そうな列へラッシュの電車待つ

戦争とは別に軍歌が好きであり

年賀状だけでは継なぎ得ぬ社会

人事異動余震に甘んじて動き

岡山県 池上知恵美

ペンギンのネジをかけたくなる姿勢

モーションへ反応のないひとになり

バックミラーの中でダンブに追越され

大阪市 橋高薫風子

倦怠期鏡も櫛も汚れてる

新入社眼鏡も一つはりこんで

新婚生活の岩井三窓君へ

皆君のものの新妻の寝顔まで

下関市 中村九呂平

母に似た体質ポリウム持て余し

倦怠期食後の一服さえずり

大阪市 榊本落児

志賀高原スキー行

無理だけはするなとスキー見送られ

リフトから落ちた話を肴にし

リフトから見ればあいつもこけている

帰り道なんとスキーの重いこと

雪焼けが事務の話題をかつさらい

米子市 石坂新雪

一家の票出世コースの長にやり

あの地位で煙突にまで手出しして

大阪市 西川晃

ガソリン臭い坊主の誑経聴いている

演たれてヌードゲイジュツ見てござる

芸術という金粉が剥けている

軍人恩給を受けることになる

貰うては済まぬ金だが印を捺す

鳥取県 田中蛙眠子

泣きに行く喪服が濃い化粧する

ハイド氏の心僕にもあった夜

老眼で縫われた母の温さ着る

神戸市 仲どんたく

ホステスに金と力と教えられ

東京出張 二句

一千万まびかんとする事故の数

江戸っ子の流感つれて帰途につき

平田市 久家代仕男

雪の散る湖上は夢のように暮れ

無情とや電話の主がもう轍かれ



人踊らして飲む人間の多いこと

大阪市 本多 柳志

パチンコで軍歌が鳴っている平和

リバイバル軍旗もほしい師団長

退官へ業者昨日の目に非ず

英雄になる冬山を無事に下り

出雲市 原 独仙

新装の舗道へ流すな事故死の血

還暦へ誰かが呉れたベレー帽

行きずりの女富士子に似た姿態

西宮市 野呂 鶴江

挨拶が面倒臭くて追越さず

降り傾る雨に場末を感じたり

遊蕩の墓へ見知らぬ女あり

佐渡市 高野 むじな

アンブルをのんで二次会まださわぎ

易入門信じないのが買うて読み

大阪市 魚住 満潮

続 西成界わい

西成の皆様と税務署の車

似た者夫婦パチンコのプロで食い

昼休み誰が持って来たか春画

売春 売春 花札を片付ける

チンドン屋三味と太鼓は夫婦なり

歩いて帰りますと婦人科を出る

核実験反対 背広擦り切れて

メタン瓦斯ぶくぶく十三間堀川も春

共産党が好きでオッサン今日も留守

愛媛県 村上 旭童

馬鹿が喰ういちご二月の店へ置き

昔昔からこの日だまりのつくしんぼ

やめても食えるのがさからいもせずつとめ

まかないさんの怒りは焼けてないさんま

ねるとすぐ朝になるのがもの足らず

倉吉市 大前 鳴枕

病院に臥て百円が身にしみる

親にまでスーダラ節で煙にまき

神戸市 傍島 静馬

金つまり幹部ボーナス保留され

負け力士病気じゃないか診てもらい

仮名つかいちがうと孫から返事が来

入学万事親の力に委しとき

大阪市 中谷 ハナ子

松の内医者も和服で診察し

大阪市 村山 光輪

車押すバタヤの女房女なり

布施市 森下 愛論

女にも酒にもあきる頃に死に

青い鳥見つけて自殺したと云い

へそくりの行方女房は笑うだけ

初日の出起してんか子に頼み

姫路市 植村 客遊子

息を吹く音寒々と海女の顔

天晴れな度胸頑固な母も折れ

大阪市 河井 庸佑

勉強で母へも聞かす声を出し

学芸会あつという間に我が子すみ

大阪府 谷沢 好祐

はさまれたジャムの姿に似て課長

魚獲る会社が豚も鶏も飼い

宣伝の声まで天から降って来て

立話娘に時間計られる

大阪府 高津 徹也

まゆずみの濃い女にある虚勢

合嬢として紅いささかもくずさない

木枯暮色ようやく女納得し

愛媛県 榎 紫光

うすうすは知って女の随いてくる

お流れを受けて昇給期待する

ケチついた金だこいつは飲んじまえ

晩酌が長女の酌でこそばゆし

青森県 工藤 甲吉



こりごりの筈の男をまだ思い
版上死世間知らぬふりをする
再婚はPTAで知った仲

松江市 小林孤呂二

二月十一日の日の丸児に聞かれ
いちばんに月給きかれた良い話

豊中市 林 夢 虹

手袋を忘れて情事の部屋を出る
幼児ねむるマリアの像の陽だまりに
二階から年下の夫おりてくる

西宮市 山 本 一 傘

金で済むことが日常多すぎて
春うらら立派などこのお葬式

大阪市 今 西 生 薑

福ほりに行こかと悪たれ口叩き
一瞬のさもしさ賽銭箱覗き
エベッさん和服ブームに目尻さげ
拍手で芸者戎を横向けせ

京都市 室 井 八 九 寸

こちとらの法事に似てるお歌会
ブラジルの写真と並び角かくし

岡 山 県 横 山 一 声

山売ってお寺も里へ降りて来る
雪の宿風呂と炬燵が自慢なり

小松市 関 戸 宗 太 郎

弁当箱だけの袍とスリ見抜き

石川県 高 山 涼 髪

湯女の子をあずかり老婆生活し

制服を脱げば父ちゃんらしくなり

修学旅行父にライター買ってくる

美称市 安 平 次 弘 道

質屋から出たその足でランデブー
予備校の願書も一緒に取りよせる

宇部市 平 田 実 男

せちがらき十坪へ十坪の家が建ち
共稼ぎはたで見える程貯めていず
殺したと云えないこともない自殺

和泉市 井 阪 東 天 紅

一ばん湯おかまは赤い物を脱ぎ
忙中閑に赤ん坊を抱いて見たく

大阪府 高 橋 尚 史

改名の運が向いたと言うて来ず
この妻のハイと答えし時もあり
おくやみへ近所隣を誘い合い

脳病院見学

目の前の遠い世界に近よれず

小松市 浅 野 芳 朗

求人欄雑役だけが当てはまり

西成へ来てポストンを握りしめ

防火演習待機をしてあほらしい

同 舟 近 詠

大阪市 橋 本 緑 雨

厭上げに生駒信貴山下にあり
新調もして貰えない年になり

須坂市 高 峰 柳 児

こと金に及んであたりこわばらせ
趣味どれも儲けにつながりもたせてい
シャッターへおっしやる通りの日本髪
歯も耳も達者老らくそわそわし
人生のたそがれ孫に支えられ

和歌山市 秋 月 宏 方

焼芋の湯気よ場末の風物詩
無配だが社長外車を乗り廻し
子をテーマに話す平和な夕ご飯
善人に見られる余徳ある白髪

新居浜市 月 原 宵 明

けちがつきだしたら魚の骨もたち
人生の午後へ買いたい菓あり
あんなのへ山本富士子嫁てしま

煉炭へ金策つきた手をかざし

見世物のように起重機ストへたち

伍健忌に出席して

偉い人じゃったなもしと三回忌



特集 花 い っ ぱ い

あの道、この道、花の道と春はたけな
わです。そこで誌上もらんまんの花ざか
りとシャレてもらったのです。―編集局

越しの方からよく地元へ御注意頂
く。

雪がチラチラ丹波の宿に
猪がとびこむほたん鍋や

丹波篠山山家の猿が

花のお江戸で芝居する

では花の春を讀え二三桜の名所
を御紹介申上げ、柳友諸兄姉の、
花見句会や、一日の御清遊の資に
供しましょう。

堀端の櫻

等の歌詞で「ささ山」は昼、日
中でも街に猪や猿が出没している
ようにお考えの事と思うが、一度
ささ山を訪ねて下さった方は、流
石六万石、青山老中の城下町だけ
あって、古文化に富み、酒は甘い
し、花はよいし、肉は神戸肉の生
産地だけに美味しく、阪神方面か
らは二時間余で来られるし、次に

冒頭デカンショ歌詞通り旧城の
四囲皆桜並木で、樹令約四十年余
数千本の桜花は、紺碧の濠にその
影を写す美観は、恐らく来て見た
人でないと判りますまい。夜はポ
ンボリの灯と共に恰も竜宮へ来た
かの感を地元の吾々でさえ感じる
位です。其の風情、又一入で詩情
をそそること、そそること！

夕桜トンボ返りがしてみた
し

の路郎師の名句が自ら浮んで来ま
す。

旧聯隊跡の櫻

丹波篠山お城が招く
ヨイヨイ
堀の桜が又まねく
ヨイヨイ
昔様な名所のデカンショで名
高い「丹波篠山」の四月、そして
桜花は素晴らしい。
がこんな桜の名所が何故もつと
世間に知られないかと初めてお

くお聞き下さい。

第四師団歩兵第七十聯隊で鳴ら
した軍都篠山は、「学都篠山」と
変じて旧兵営は、県立農科大学、
同農業高等学校となり、お医者さ
んの卵も一年間ここ農大であたた
められます。

こんな山間へキ地で哺育園から
大学迄、アラ花の名所の御案内が
何だか自慢たらしうなつて恐縮、
この地の内外を埋める桜は聯隊と
共に植えられたもので、昔の武人
の夢を語り、今平和のシンボルと
して其の研を競う様は――早く見
に来て下さい。

王地山の櫻

ここは篠山市一否、篠山町の東
端の低い丘陵で七尾七谷あり、町
立公園で、殊に靈驗イヤチコなる
王地山稻荷社を祀り「負けざらい
稻荷」として、入試に、商売繁昌
に、又は選挙等に神助を賜わら
んと参詣する人、京阪神は申すに及
ばず遠く東京方面よりも参詣の人
は絶えぬ。

この王地山の桜はこれ又絶佳
で、桜下各所に宴席の筵を掛け、
月を仰いで未だ盃を重ねる組数多
あり、と云った洵に好適の場所で
す。丘の一本峯に「殿下山」と云
うのがあり、大正天皇が皇太子の
頃、大演習の「御野立所」となり
て「殿下山」と称し篠山平野を一

望に収む。
稻荷さんの直ぐ上にミネージッ
クサイレンがあり、午前五時から
妙なる音楽により時を報ずる。
稻荷さんもうサイレンに馴
れ給い 無鬼
の句を生む。

川雑支部篠山

こんな環境で、川柳の花が咲き
始めて約十年芽生えはもう三十年
近くなろうか、路郎先生にも幾度
かこの芽を育てにお越し願った事
である。幸に優れたる柳人多く、
川柳まつりの優勝権も二回我が支
部篠山を訪れて呉れました。
各地の柳友諸兄姉「花のささ
山」川柳篠山支部へ是非句会をお
持ち下さい。そして篠山の味を十
分楽しんで戴き度いと念願してお
ります。

・ 京 の 花 ・



雀 烏 中 田

わたしゃおたふく

お室のさくら

はなは低くとも 人が好く

豪華絢爛なのは仁和寺。

敷島の大和心を問わんとならば、朝日に匂う山桜がよい。

大宮人の桜かざして今日も暮す

都の名どころは、見る人の心々に、それぞれの好き、それぞれの

話が尽きない。

田舎の紳士が私に聞いた。

「嵐山はどこかね」

「あの橋の向う右手の山です」

「あれがやかましい嵐山か、あんなものなら、わし等の国にいくらもあるだ」

都会のインテリと自認する者の中にも、かかる紳士は多い。

西すれば、月の名所広沢の池、

名古屋流れて尚聞こゆる大沢の池には、散る花の水に鏝むもよい。

怨讐を彼方に桶正行と足利義詮

が枕を並べる築城は、落花に埋って静かである。

藪鶯の雀鳴くあたり藤原定家の

厭離庵、荒れるに任かず為家卿の奥津城、小町ならずも、花の色は

うつりにけりなと吾を嘆かす。

小倉山を背景の二尊院、落柿舎

去来の墓のあたり山桜はすべて美しい。

萌出るも枯るるも同じ野辺の草

祇王寺には名花照葉の、今は尼

姿。滝口入道を訪ずれる横笛。新

田義貞と勾当内侍。苔蒸した五輪

塔の傍には若い八重桜。祇王等が

墓か、清盛の墓か。その清盛の娘

徳子に宮中を追われた小督の局

は、とわに大堰の瀬音を聞く。

天下第一の名勝は、洛西嵐山を

中心に、嵯峨の風情にある。

扱て洛東を眺むれば三十六峰、

八瀬大原、鞍馬の山の雲珠桜、比

叡の麓に修学院、花や番茶の白川

女、静まりかえる南禅寺。石川五

右エ門ならずとも、絶景かなと洩

すべし、岡崎界限近代の、建築群

に入交る、渡米桜も捨てがたい平

安宮の紅桜、柳の糸に織りまぜる

朱の大鳥居あとにして、月は腫の

東山、祇園清水東福寺、稻荷桃山

宇治の里、醍醐の花は大開の、心

にからむ糸桜、御所南庭の橘に並

ぶ左近の花の色。さあさ皆さんお

揃いで、都の花を見にこんせ。

酒なくて何の己が桜哉、飲めや

のめめめ、

下戸共はさがりおろうと花

の山 古川柳

折るべからずが見えぬかと

下戸叱り //

叱られた所へうちやる花の

枝 //

花の山抜いた抜いたが嵐な

り //

くれ //

花のあす下戸にしたたか意

見され //

つまるところ酒屋の為の桜咲

く //

江戸時代中期、初代川柳が盛ん

な頃の、安永二年三月、仁和寺法

親王の日記に、寺内で観桜の乱痴

気騒ぎがひどい有様を書いて嘆い

ていられる。

花を後りえに酒に溺れて騒ぐ者

と、之に眉を蹙める者がある事

は、今も昔も変わらない。

花を愛する者は、品のよい花見

をしたい。従って、風景や史話を

重く、品種の善し悪しが問題であ

る。

植木屋が吉野桜と称して売る

桜、市や府の役人を初め趣味の低

い者が、しきりに植える。

「染井吉野」種は、本来我国の花

でなく、実に下品な種類で、桜を

誇る日本桜の面汚しである、と予

ねがね憤慨していた処へ、一杯機

嫌、目に余る俗物共の横行を散き

つぶせと共鳴者に呼掛けた。「染

井吉野撲滅同志会」を結成、中の

島公会堂で、第一回講演会を開い

た処、満場立錫の余地のない大入

り。僕の大獅子吼に皆、賛成々々

と言う。少しおかしいと、よく見

れば、サクラばかり。

春秋 春 城の形式は平山城で、東西六百メ

田螺壳どこの落花かはかり 筒ん坊

込む 花の咲く事も悲しく歌に擬

り 周魚

桜咲く国のホテルの椅子に 雲雀

より 野良仕事めしは揃って花の

一 下 一 芙

・みちのくの日本一・



吉 甲 藤 工

城の形式は平山城で、東西六百メートル、南北九百六十メートル。周囲は三重の濠をめぐらしたもので、いまも白亜の天守閣が残っている。また「お城と桜」の桜は、その天守閣を中心にごつと二千本。種類は八割がソメイヨシノで、ほか八重などもふくんでいる。藩日記によると、正徳五年（一七一五年）家臣の有志が、二十五本の山桜を京都から取り寄せて献木したのが始まりで、その後、日清戦争の勝利、大正天皇のご成婚、日露戦争の勝利など記念し祝って植えたのがこんにち全国一を自慢する「弘前の桜」の歴史。この「桜まつり」は毎年、四月の終りから五月の初めにかけて催されるが、このいわゆる観桜会が始まったのは大正七年ごろ。いまのいわゆるブン屋（新聞記者）や士族あがりの市会議員などで組織された「のんきクラブ」の面々が、ある日それぞればイオリン、三味線、尺八などを鳴らしながら、お城まで仮装行列をやったのがそもそも初めとなっているのも面白い。爾来この花見は、年を経るにつれて盛んになり、レジャーブームの昨年など一日二十万の人数をみたほど。ゆるやかに弧を描く石垣がお濠の水面に流れ、白亜の天守閣と

国立公園「十和田湖」から西へ十里、富士に似た津軽の秀峰「岩木山」のふもとに「弘前（ヒロサキ）」という街がある。ここは「お城と桜とりんご」で通る街だが、とくに桜は「日本一」とまで土地の人は言っている。「お城と桜」のお城は、弘前城のこと。津軽藩祖為信が、慶長十五年（一六一〇年）に築城をはじめ、二代目信牧が完成した。築

花とボンポリ、朱塗りの橋が、逆さに水面に写る夜の景こそは、まさに絶景、本番である。

夜桜や光源氏に逢いそうなる

×

弘前川柳社

ができた昭和の初め、同社

が開く花見の句会には必ず出かけて行

った。地元の御犬、成田我

州を中心に、

「川柳みちの

く」の小林不

浪人、後藤蝶

五郎、山田よし丸の故人組、それに長谷川霜鳥、佐藤狂六などがよく集まり、句会のことばかりは花の下で酒を飲んだ。

思えば三十余年も前のこと。その頃の観桜会は情緒があった。中年以後の女の人は、嫁入り当時の晴れ着に、白いショールを肩にした。ガス灯のゆらぐ出店には餅類

花火、綿飴、それにラムネが並べられ、玉ころがし、バナナの叩き

売りも風物詩の一つだった。いなせなあんちゃんが、向こう鉢巻に

印半纏で戸板に並んだバナナを威

勢のよい声で叩き売りすれば、そのそばでは綿飴屋がふんわりした

綿船をつくって子供の夢をかき立てた。艶歌師もいた。キリスト教の伝道師もいた。哀調を帯びたサーカスのジンタ、クラリネットの響き……

昔の花見はいまの

ように単なる馬鹿騒ぎだけではなかつた。

あの頃はよかつたという事になり

×

ところでいま私は

ここの桜を長いこと見ていないことを思い出した。というの

は、旧ろう婿を迎えた一人娘が二才のとき、私は娘をおんぶした妻と連れ立ってここの花見に出かけた。日曜か祭日とあって列車は超満員。これだけでもたくさんというところへ、あの子はどうしたのか、汽車の汽笛がボーと鳴るつどビツクリ仰天、からだのどっかにまるで火でもついたときのよう

に泣き出すのである。これには妻も私もホトホト弱った。懲り懲りした。

以来私たち夫婦に弘前の花見は御免！ということになり、それが

こんにちまで尚続いていたというワケ。早いものですでに二十年余

も前のことだが、そのときのあの子も明年あたりの花見では夫婦で同じ目にあうことになるかも知れない。そしてまた私たち夫婦は、ちと年寄りじみた話になるが、

女房と土手の桜で間に合わせ

ということになるのではないか。

・花の戯むれ・

那谷光郎

ボンポリが見え始めた頃、一人が尿意頓発、どうにもならなくなって俾から降り放尿し始めた。他の三人（私も含めて）それにつられてか、降りて四人見事に列をなしてやらかしていた。

突然「オイコラ」と怒鳴る声、

一様に振り向くと、警官!! しまったと思ったが後のまつり。誰か一人が、生理的現象、不可抗力だよと変な理屈、一人はもみ手する、一人は半分威嚇の態勢、この三拍子が意外にうまく芝居となって警官は苦笑して去って行った。

今なら軽犯罪だが何のこともなくすんでしまった。花見は千鳥足で通り抜けただけ。今から思えば

微苦笑を禁じ得ない。「オイ花見に行かんか、今が見頃だ」と「今日は駄目だ、もう三日したら月給が貰えるから行こうや」

思えば月半ばは文なしているサラリーマンの悲哀、月給を貰つてとにかく出かけて見たらもう花は散っていた。誰も居ない寂しき、

葉桜見もよいものだなアとは負け惜しみ。

月給日もう葉桜になっていやア踊ってる踊ってる、何とやらしないじゃないか、あの踊りより、まるで原始人の踊だ。アレあ

の仲間滞納してまで花に浮かれているとは、今度うんと油を絞ってやろう。

見 税務吏の腫に滞納も居る花

サア飲めや唄えや、年に一度の花見だなどと豪華な宴を張った翌

日逮捕状、何事だろうと思えば汚職の疑。いくら豪華な遊びでも汚職の金では、さぞ後味が悪いことだろう。

花に酔え汚職の金でない限り

アアくたびれた、こんなに足を棒にして駆け廻つても、足りていきますよと嘘ばかり、品物が一向に売れない。ムシヤクシヤして叶わぬ、人は花だ花だと浮かれ廻つて居るのに、こんなに汗をかいて廻つても埒があかぬ、ええやけ賣だ花へ行こう。

行商の汗拭く山の花盛り

曇って来やがった帰るまで降らねばよいがなア、花見の幹事が心配顔だ。

花の下ではドンチャン騒ぎ。アツとうとう降って来た、それも大雨、花の宴の慌てようてんやわんやだ。幸いに通り雨だった、陽が照り始めた、誰かしらこんな所に

手拭を落したのは。

花の雨誰か忘れた豆しほり
消防車のブザー!! 花見の人波

を割って、何と無粋な!! 然し火事は何処だろういささか気にかかると。何!! 警戒だ馬鹿らしい。又酒宴が始まった。一瞬のコメディではある。

花の春無粋な消防車のうなり

「オイ金を少しばかり貸してくれんか、二三千円程」

「何だだしぬけに何にするんだ」

「実はな花見に行こうと彼女に誘われたんだが、少し足りないので恥をかくと困るからなア何とか頼むよ」

「背負っているなア」

恋まし花見の金を借りにくる

春だ春だ花の春だ。人はみな浮かれている、もの足らん、何処かで飲み直そうじゃないか、それもよからう。さてどこにするか。アアあそこがよい、一寸電話して都合を訊いて見よう……公衆電話……

「モシモシ」

「ハイハイどちら様で」

「オレじゃよ」

……お早くいらっしやいお待ちしていますとのこと、いそいそと立ち去った後に残っていたものは、

公衆電話の春よ折詰忘れさせ

光郎

・奈良の春・

宮口 笛生

編集局より花の名所を紹介してはしいとの事で、うんそれならと、すぐ返答出来る程有難い事に、私の住いする奈良は、皆さん御承知の如く花に埋まれる位恵まれて居り、何処から自慢の花を咲かそうかと迷わされる。

先ずは手近かな処から参りましょう。第一に、何時来ても何度足を運んでも、あき足りないのは奈良公園であろう。

シーズンともなれば毎日何万かの人で賑わう。ましてや満開の日曜日ともなれば、十万の花見客を収容し、終日楽しましてくれるのも奈良公園なりせばである。

誰はばからず緑なす芝生に、酒宴の一席を設ける楽しい一日、又家族団欒でひらく寿司の味も、花と共に一層の醍醐味があると云えよう。

次に同じ奈良市の西端に、あやめ池遊園地がある。近畿日本鉄道が力を入れていただけに、年々良くなって居る。毎年何かの催し物が開かれ、花咲き狂う中の上池や下池にはボートが浮び、若きアベック連にはもってこいの処である。

円型劇場での春のおどりを初め動物園、モノレールやウォータッシュット。其の他数多き子供遊戯場があり、子供連れの清遊に又良い処と云える。

満開ともなれば広い遊園地も、花が盛り花に埋められる景色が通勤の電車内より見られる。

続いて西に生駒の桜がある。ケープルの麓より生駒山上へ、宝山寺を中心に山腹を花で埋める眺めも、山上の眺めと共に、又自慢の一つである。

生駒山脈に添うて南に信貴山がある。有名な毘沙門天様と共に桜も見事である。此処には料亭が並び、美しき妓の酌で花見酒にはうってつけの地と云えよう。番傘の先輩長宗白鬼様にいただいた短冊の一句

白鬼

丁度信貴山にあてはまるんじやないかと思う。実になやましき限りである。十余年前の私の句にも

酒くさい男信貴山いま盛りがある。春に一度は出かける私である。

笛生

次に郡山城跡の桜だが、金魚と共に、戦前は郡山近郊の人で賑わったが、戦時中軍の御威光により、惜しくもその大半は伐採され、戦後市が力を入れて戦前にかえりつつあるが、自然若木が多くまださみしい。

子供の頃、花見と云えば郡山へ連れて行ってもらったもので、サーカスや催物があり、賑かさは今でも良く憶えている。

最後に吉野山がある。日本一の桜の名所と云っても過言ではないと自負している。下の千本より咲き始め、中の千本、奥の千本と、三段階に別れている。古き歴史を秘めて、歌、俳句等にたくさんうたわれているのも、皆さん既に御承知の処である。

あまりにも広範囲に亘り、ハイキング兼ねての花見と云うところである。花だよりあってより奥の千本まで、四月中花が絶えない。シーズンともなれば夜桜が又見物であろう。山肌一ぱいに浮き彫りされる花こそ実に壯観である。

以上、奈良県観光課の宣伝係のように言ってしまうが、いずれにせよ自慢したい桜の名所であ

る。花と酒は付き物で、酒を召し上る方には誰でも一つや二つの失敗があるもので、私にも花見酒の失敗が一つある。

終戦直後物の無い頃、闇値で苦労してつくった紺サージの背広を着て、雨あがりの奈良公園で酔っぱらい、一張羅をだいなしにしてしまい、以後どんな酒宴にも背広は着せてもらえなかった事がある。何時も国鉄の制服で行った。

ポリボックスで酔いざめの水のみ 笛生

も、当時の恥かしい一駒でもあった。焼酎が配給の合成二級酒だったようだ。

他に、奈良より国鉄で十余分足をのばせば、笠置の桜もあるが、他府県になるので止めておく事にする。(完)

こりと痛みに
サロンパス
久光兄弟株式会社
東京・佐賀・大阪



妻妾茶ばなし

東野 大八

けりだ。

ともあれ文子夫人にとって武帝が居合せなかつたことは痕事だが、理想の賢妻も手加減がいる。あまりケタはずれだとオンドリまでフライにされる。〃妻をめとらば才長けて、みめ美わしく情あり〃明治の書生っぽの理想も、当世とあつては一段の推こうの余地が出てきた。

日本一の高齡知事で、生きてゐる間に銅像になつた前岐阜県知事武藤嘉門老がさきごろ話してくれたことだが、女房はほどほど、二号は中味だそうだ。

「九十の齡を越えていましむじみと感じとることは、人生つて奴は度し難いもので、そのむずかしさを解きほぐしてくれるのは女をおいてない。女といつてもそれは女房であり、二号だ。政界、財界を眺めても出世した奴は必ずでき

漢の武帝は、夏の盛り三伏には側近の文官に肉を贈つた。土用うなぎの代用と思えばよろしい。

この肉を、係りの役人が配給しないうちに、東方策という宮中の曾呂利新左衛門みたいなのが早いと失敬した。これが武帝にバレて御前に呼び出され、その行為を詰問された。それに答えて彼いうよう。

「みことのりもまたず頂戴したるは無礼も無礼。しかし臣が剣をもって肉を切りとりたことはなんたる壮烈、しか

もそれをすべて細君に贈ると

は、まあなんと情の深いこと」

思わず笑つた武帝は「では

その細君とやらにあわせろ」

と命じた。ところが現れた細

君は細いどころか大層肉づき

よく、しかも絶世の美人。

さてこのグラマー美人、御前

に呼び出されて夫の危急存亡

このときにありと察したので

「ミカドのお肉を頂き、かく

も肉づきよくなりました」

と答えた。どこのお国柄とて

美人にヨワイ。しかも才知一

しおの美女とあつては話のほか、武帝も思わずニヤリとわ

らつて

「そちは夫と入れかわれ」

とその即妙の細君の才覚をほ

められた。世にいう「細君」

とは、この一席から世にひろ

まったという。

ところで話は古いが武鉄事

件でひっかかつた櫛橋渡代議

士の細君文子さんは、そのか

み久留米小町とうたわれた美

人で、国会中でも

「彼女が政治家となり、櫛橋

君が、家事に当ればよろし

い」

とまでいわれた。文子夫人は美人の上に、九

州切つての資産家の娘だが、

この彼女が男前も十人並以下

で、しかも貧農のセガレの渡

さんを一目みて

「わたしはこの人の妻とな

る」

といい切つて譲らなかつた。

なるほどその相手はやがて代

議士となり大臣となつた。そ

のケイ眼、その自信たるや大

したものだが、勢い余つて、

渡さんは汚職で捕われ、参謀

役の文子夫人と仲よくアベツ

ク拘置所行きとなつた。あな

たとなればどこまでも一とは美談だが、時には場所により

のいい女房と二号をもっとつた」

加藤高明(三菱)野口遊(日本窒素)安達謙三などその点三羽ガラスだった、とつけ加えた。

この三人は、みんな奥さんのほかに二号がいた。二号がいるとスネに傷が出来て、女房へ気兼ねが生れる。その点を心得た奥さんが程よく牽制かつ忠告を惜しまないというわけだ。

「そりゃああなたわたしも女別にメカケがいるときけばりんきもします。しかし、正面切ってりんきしてたんではおたがいが損、別に生命に別状がないことだし、こっちの顔をつぶさなければ、とサトリを開けばあなた、かえってカラダも楽ですし」

と野口遊夫人は悠然とかく述べ懐している。

五郎正宗は「いい刀ほどサ

ヤをぎん味すべし」といったそうだが、やり手で切れ者の亭主の抜身を収めるサヤは、

一番先に傷むのがサヤだ。恐妻、カカア天下で別口のサヤの存在で人権を確立されていれば、法的保証もかく固たる以上、何をじたばたする必要があるか、老後は身体より気分第一、安達謙三の細君もこゝろ禪境的な所感をのべられていたそう。

世の常識からすれば「女房はソロバン、二号はカラダ」だそうだが、これの逆もあり両者兼備の女丈夫もいそうで、次郎長の大政、小政ではないが、そんな両腕の高級副官を抱えていれば男たるもの決して悪くなりっこない。

もっともボクなどは、女房一人でさえかかえ切れないのだから別口どころの話ではない。一人だけでも気兼ねのし通して二人となれば一体どう

いうことになるか。もっとも武藤さんの口からこんな別の話も出た。

浜松の金原明善財閥から招かれたとき、わしはこんな話をした。

金原さんは全財産を天竜川治水のために費い果した。そのため堤防の上に堀立小屋をたて、奥さんと二人っ切りで住んでいた。明治天皇から金原さんの功績を称えて拝謁を仰せつかったときなど、奥さんの着物を借りていった。金原さんのエラさは、かくのごとく奥さんにあった。

大資産家の金原家にくる花嫁さんだけに、つりものだけでも十何サオあったことだが、最後には一年中単衣だけ、ということになった。着物はもとより住む家もなく、川の上の冷たい堀立小屋で乞食同然の暮しだったが黙々と一言もいわない。この内助の

功は、普通の婦人には到底できることではない。

「どこ出身で、なんという名の人か、それさえも知れないこのひっそりと一生を終った奥さんこそ、賢婦人中の賢婦人だ」

ボクも同感である。忍従と奉仕にあけくれた明治の女性らしい、ごく典型的なご婦人かと想像されるけれども、夫を信じ、その事業を理解し、つねに影、形にそう如く奉仕に生涯を埋めつくしたこの奥さんの苦しみは、たとえようもない「女の一生」であったはずだ。

日本の男性というものは、貞淑でつましい女性をつねに夢みるが新らしい時代には理知

と明るさが必要とされている。母型も近代的にといいわけだが、これもほどほどに、

檜橋夫人型も困るし、金原夫人型でも活気がないだろう。要は、たがいに人権の場になった相互信頼こそ人生の第一、ボクにいわせれば賢い奥さんなら、何もムリして二号を持つ必要なし、である。しよせん、女房だけで足りないのは、いかにできる人物でも男としてのどこかに缺陷があるように思えてならない。

☆



大阪読売新聞主催

開催中 / 5月31日

太平洋博

・自然と民族をたずねて・

入園料・大人70円・小人30円

宝塚ファミリーランド



ドナテロの少女と路郎

ドナテロの少女

麻生路郎

リリのこと

五女のリリが、「わたしは、お父さんのところにいるから、社の仕事をしているが、結婚したら、川柳の仕事はしなくなるかも知れないよ。それでいい？」と云ったのは十年も前のことであった。

「ああ、いいとも」と私はアッサリ答えた。

男まさりのリリは（梨里は雅号）戦時中の紙の不自由な、雑誌社の苦難時代から社の仕事のために力闘し、最後には編集長として、編集局を切つて廻り、新聞でも二代目娘として紹介されたくらいだ。不朽洞会の人たちも、「いっそ梨里さんに養子をして、先生の跡を継がしたらどうですか」との意見があったものだが、私としては、私の跡を継承してくれる人は天意によって、おのずからきまるものだ、たとえリリが最適任者であるとしても、リリの欲しないことを、押しつける気持ちは少しもないと云っていた。だからリリのそうした質問にしても、何の躊躇もなく答えたのであつた。

た。

リリの結婚が少しく遅れたのは、私が社の仕事のために手離さないのではないかと思う人もあつたらしいが、そうではなくてその当時、結婚適齢期の青年の多くが戦争の渦中であつて、結婚どころの騒ぎでなく、それがためにリリも、余所さんの娘たちと同様、良縁に恵まれなかつただけである。

昭和三十一年四月十三日にリリは、シベリアに抑留され復員の遅れていた河内市の青年と結婚し、現在は二人の男の子に恵ぐまれ、幸福なその日その日を過ごしている。時々、孫二人を連れて来て、数日を実家で暮らして帰ってゆくが、私はそれでいいのだと思つている。

梨里の詠んだ句

私が玉出から堺の出島の海岸に移つたころには、リリは少女時代であつた。そのころ私達夫妻の留守中に、奈那（四女）やアート（二男）や一步（三男）の姉や兄や弟と句会遊びに余念がなかつた。二階座敷の鴨居に、席置「何々」腹乃センなどと母の名をしたためた課題を貼つて、みかんなどの賞品を出し、句会ごっこをしていた。そのころのリリの句は、ま近な素材で作句していたが、いつも貧乏川柳だつた。それが、いつ

「川柳家戸籍調

べ」に掲載され

た芳名録（一）

「現代柳人録」は斯界に活躍された人たちや目下盛んに活動を続けていられる人たちの文獻として大変好評を博して居ります。

戦前に掲載された「川柳家戸籍調べ」の各位は「現代柳人録」には再掲しないことになつていたので、ここに「川柳家戸籍調べ」に既掲された各位のご芳名を發表し、既に故人となられた方は別として住所等に異動のあつた方々はご一報を煩わしいものです。補遺として掲載し柳人録のよりかすべきを期したいと思つて居ります。右の表は大正十四年四月十五日発行の本誌二巻四号以後の誌上發表順によつたもので、川柳に手を染められた年代順でないことをお含み願ひます。（不死鳥）

福元紋太（神戸）麻生路郎（大阪）井上凡平（大阪）川上日車（近江）岡本映赤（名古屋）小田夢路（大阪）若林吐露楼（山口）安川久流美（金沢）本田溪花坊（大阪）小田愚劣（室蘭）塚崎松郎（大阪）松本波郎（大阪）喜多柳人（大阪）竹内多聞（大阪）大島壽明（大連）阿部悠々（大阪）加納元山（大阪）北山悟郎（大阪）北山十字路（大阪）坂井久良岐（東京）浅井五葉（大阪）野子

- 省二（朝鮮）吉川啞人（大阪）橋本二柳子（大阪）二口句三味（石川）岸本水府（大阪）坪倉志貴南（旭川）福島乾坤（大阪）河野春三（堺）黒木英豆（鳴尾）原史風（大阪）木村半文銭（大阪）高橋かほる（大阪）小林義矢満（大阪）金川佳鳴（堺）勝間長人（大阪）久世一路（大阪）川村花菱（東京）亀井花童子（函館）三浦太郎丸（東京）大菅文銭（京都）神崎一閑子（神戸）高橋古城山（大阪）井上劍花坊（東京）矢田右大臣（仁川）森田輝翠（大阪）柳瀬子行（大阪）大休一休（神戸）庄万よし（大阪）篠原春雨（甲府）青砥不二綱（松江）小西兎糸子（金沢）荒木京之助（山形）関本雅幽（大阪）森窪山子（大阪）太田一声（岸和田）田中吾呂八（小樽）布部幸男（京都）徳田双柳（大阪）平井光太楼（大阪）横田眠声（大阪）井上刀三（大阪）杉村敦象（大阪）竹田芦徳（大阪）小阪随帖（大阪）喜田飯山（大阪）麻生霞乃（兵庫）林田馬行（大阪）窪田銀波楼（金沢）住夢遊（神戸）加古しげる（大阪）西村山月（大阪）三条東洋美（神戸）宮島竜二（金沢）駒井美の作（大阪）山川紫明（京都）中川霧太（神戸）牛窓屏三呂（大阪）堀内静雲（大阪）岩崎柳路（東京）今井卯木（横浜）皆川羊白（京都）松本助六（大阪）大山一狂（神戸）東谷開路（大阪）西垣松雨（大阪）森田一二（名古屋）松山千代二（東京）熊本博久（大阪）船井小阿弥（東京）大山露斗（広島）酒井駒人（千葉）渡辺虹衣（大阪）（以下次号）

の間にやら一人前の川柳が削れるようになり、大阪江戸堀のビルへ出て、社の仕事を手伝うようになった。

その頃の川柳は主として女性の心理を真ッ向から辛痔に詠んでい

た。少し拾って見よう。
女なる悲しみおんな酌をする
腐るからこれも喰べとく肥り
よう

先ず集まればやせたい娘ばかりなり

石橋を叩いて恋に見放されたい子から女の価値がまた下がり

蠶とまったと言えずお菓子を買いた

御近所の子にアババをして通り

光るものつけそれが女の総べとは

いくらでもあるが、これくらいにしておく。とにかく、女流作家の一人として知られていた。結婚をしてから作家をやめた訳ではないが、社の仕事からは全然たずさわらなかつたが、私としてはもとより承知のことなので、社には少しも影響のないだけの処置をとって来た。いつ結婚をしてもいいよとは云つたものの、それには多少の結婚費を要することは云うまでもなかつた。相手方は見つかつたが、結婚費がないから、みすみす良縁と知りながら、見送らなければな

らないのでは、娘としてはしんがいてもあろうし、親としても不甲斐ないことだと思ひ、川柳にすべてを打ち込むために、清貧に甘んじていた私も、ひそかに好きな酒を節して、結婚費を準備した。い

よいよ結婚がきまると、リリに結婚用品の予算書を作らした。それだけの金を与えることにした。

お父さんは忙しいだけでなく、今時の結婚に何が要るかをハッキリしないので、是非要ると云うものを研究して買い整えろと云つたところ、自分で研究してムダなものを買わないように心がけ、一つの品を買うのにも問屋などへ出かけ、出来るだけ安く買って、外の品が世間から買えるようにつとめた。世間から見ると、親として無

暴なようにも受けとれようが、又愛情に缺けた親の間では、このようが、リリと私の間では、思

方がムシロ合理的な方法であつたのである。果してリリの買うて来た品々の中には、私には思うても見ない品があつた。その方法でリ

リも満足したが私もこれはいい方法だと思つた。私服用の下駄箱が少し小さいようですねと仲人さんに云われ買いかえた位のもので

にして結婚の荷物は、万事OKだつた。私は人一倍子どもを愛していたが、どの子に対しても猫可愛

がりはしなかつた。

リリが結婚して、一、二カ月経つた或る日のこと、私は微醺を帯びて、心斎橋筋を南行していた。そして洋画材料店をのぞいていた

ら、その店に勤務している知人に呼び込まれた。ふと見ると、実に

清潔な感じのする純白な少女の石膏像が眼にとまつた。私はフラフラとそれを求める気になつた。そ

親ごころ

それはドナテロの少女だそうだ。既に暮れかかつた街へ、こわさないように抱きかかえて地下鉄へ降りて行つた。その時の私の気持ちは嫁したリリの身代りのように思えたのであつた。やはり私はリリを手放した淋びしさが、心の底に巣食っていることを知つて愕然としたのであつた。

その後、私が失語症、失書症で病臥した時も、飾り棚の上から私を、看護してくれているように思えて心強く感じたものである。

しかし私はドナテロの少女の胸像につけては黙して、誰にも語らなかつたが、昨年の十二月、大阪中央図書館へ行つた時、十三世紀から十四世紀の伊太利の彫刻家ドナテロのことを調べてもろうために、この秘話を館長にまで談したのであつた。

私にとってはドナテロの少女はどこまでも、愛娘のリリに外ならないのである。親と子の繋がりは未来水劫のものか、不思議な繋がりを持つものだと、しみじみと思つた。

(続吉の4B③)

鳴立庵庵主継承に際し

短冊頒布会

(趣意書)

山路 閑古

今回計らずも、相州大磯の鳴立庵に、十八世芳如庵主の後継者として迎えられ、十九世庵主の名跡を継承することになりました。鳴立庵は西行法師の遺跡である大磯こよろぎの海浜鳴立沢に建てられた庵室で、元祿の方、三千風

(二世)鳥酔(五世)葛三(八世)など代々著名の俳諧師が、俳諧道場として経営し、伊賀の義虫庵、近江の幻住庵などとともに、俳諧の名庵として知られておりま

す。小子はまだ都下に公職を帯び、塵勞を重ねつつ糊口せねばならぬ現状にありますので、直ちにこの古庵に居住して、風雅三昧の

生活に入る訳にもまいりませんが、代々の庵主が色紙短冊を書き

乏しき費用を集めつつ庵の経営に充て、以て今日にこの遺蹟を持ち

伝えた風流精神は、速かに実行に移さねばなりません。

今や世を挙げて、風俗の変換、世道の傾斜、ともに著しきものが

あり、超然たる文学界もその例外

ではありません。古色蒼然たる風流精神が果して通用する世の中であるかどうか、まことに疑なきを得ません。小子は俳句、川柳、連句を通じ、多年俳諧文学を業し

み、馬蹄漸く耳順を越えました。古格を守り、古人の道を行ない、

物情を離れて風流を楽しむことは、尚世道人心の頹廃を救うものであることを信じます。同好、同

学の士又無きにしてもあらず、これを頼りに鳴立庵に入庵するもの、初志を貫徹せしめんの所存に他ありません。

入庵に際しては早速若干の費用を要しますので、清貧の代々の庵主がなしたように、短冊など認め、大方有徳の諸君子の合力を仰ぐべく、拙句悪筆で、とても古人の比較にはなりません。ここに十九世鳴立庵主として、入庵を記念する短冊頒布会を企画することになりました。小子声援の為るって御申込み下さいませ。

一、短冊一枚につき千円(送料とも)何枚にてもよろしく、句は変えます。

一、縮切り四月末日(入庵披露立機式典が四月廿二日)となつておりますので、御送金がそれに間に合えば、まことに助かります。



麻生路郎 選
北川春巢 選

プラトニツララですポストの赤が好き 福岡市 田口 麦彦
 日本のアンテナ情事に明け昏れる 同
 週刊誌一冊庶民の麻酔剤 同
 車窓から見ればいのちのある田圃 同
 温室育ちですと新任如才なし 同
 年寄株もなく停年が近くなり 同
 予備校の青春くすぶるほかはなし 同
 日本の悪を浄めるような雪 同
 第二会場の方では大言壮語する 鳥取県 鈴木村 諷子
 伴せと いうは 姑早く死に 同
 酒の出たところへ小便して 帰る 同
 春の水籠の鳥にも入れて やり 同

花びらの柄の女房と花見に出 同
 福笹がもう邪魔になるはしご酒 大阪市 板倉 天悟空
 四十からの薬とやらも服み始め 同
 電化した生活へ和服揃え出し 同
 停年が近づき 易書など 漁り 同
 回復期句作は○の日は 続き 同
 一生の不作と 他人まで 思い 竹原市 杉原 愛鳩
 B G十五年と云う 不しあわせ 同
 風邪気味の妻が里へはとんでゆき 同
 縁談が順調すぎて 不安なり 同
 ためらいもせず受けた娘の 飲 かつらぎ 同
 歌会始盗作 一句
 洗いようもない黒主や小町なり 兵庫県 河原み のる
 メタセコイヤよ羨ましいな百万年 同
 自家用車持てぬ伴せ事故もなく 同
 時報 ワイルド 意地だけがほど達 ミ 鳴り 同
 シームレスか おもたら 春をもう脱いで 同
 歯が抜けて笑えば醜の門が開く 福岡県 小田 無限

現代柳人録

(一) 姓名 (二) 雅号 (三) 別号
 (四) 現住所 (五) 生年月日 (六)
 出生地 (七) 職業 (八) 電話 (九)
 自信の句一句 (一〇) 川柳以外の
 趣味 (一一) 配偶者の有無 (一二)
 川柳に手を染めた年月

(116) 森脇幽香里

(一) 森脇文代 (二) 幽香里 (三)
もりわきふみよ ゆかり
 早野ひとみ・星瞳 (四) 広島市鷹
 匠町六五(五) 明治41年1月11
 日(六) 広島市十日市町五五(七)
 (八) 団体役員 (八) 広島三十五六〇
 四(九) かきひへかきはかなし
 きさがをもち(一〇) 水彩画・野
 球見物(一一) —— (一二) 昭和
 三年十一月

(117) 長野井蛙

(一) 長野元一 (二) 井蛙 (三)
ながのもとかず せいゑ
 —— (四) 山口県防府市大字西佐
 波合字幸地一三二六ノ一六(五)
 明治32年3月18日(六) 山口県防
 府市大字三田尻林字新道(七) 会
 社事務員(八) —— (九) 勤ける
 伴せ靴の紐をしめ(一〇) 旅行
 (一一) 有 (一二) 昭和十六年八月

(118) 清水春蛙



吹雪く夜は神代以来の息もつく	同	潜在意識思わせる様な抽象派	同
漂泊の昔は一級採炭夫	同	戦死したあの子も寅の年だった	古谷まさる
世紀の横綱マスコミを去る	同	服装は人に負けないスキーヤー	同
朝潮去つて一列淋し波頭	同	雪焼けでございますよとお仲人	同
働いたオールドミスも類焼し	同	失恋がもつて肝臓悪くなり	常岡 孝風
風邪の子へ半日レコード鳴りつ	内藤きさ子	乾杯が多ければ人生は愉し	同
胃下垂の話にウマが合うも齢	同	大衆のためにと当選して汚職	同
無器用だから労力で埋め合わせ	同	夫婦相和し三十年の貧	嶋野ひろし
犬連れて窓をたたいて逢いにくる	同	金策へ妻のハッピーで立上り	同
メスを呼びつづけうぐい籠に死す	同	本籍の土を踏まない子が五人	同
恋 二句	同	流感の町にんにくの息に逢い	木村 涼人
掌を合わす胸のあたりへしのび	久米奈良子	名言を追う保守性を悲しとす	同
ほんものの恋は逆境にもめげず	同	秒針のさだめ小売屋揉み手する	同
歌会始をテレビにて	同	トンネルを出る絶景を立って待ち	都倉 求女
千年の昔へわれらよみがえり	同	カタカナが書ける程度の日本好き	同
週刊誌喰いいるように読むラッシュ	鵜飼 鮎子	満員の汽車で不景気話し合い	同
フランス美術展 二句	同	正直に話し相手を哀しませ	山内 静水
混雑に彫刻驚くように立ち	同	最後の仕上げ生きてる飽くず	同

味の七-コ

王 川柳

心 斎橋大丸北の辻東へ

御 門

TEL(271)6684

御集会には階上御利用下さい

- (119) 河村 日満
- (一) 河村石太郎 (二) 日満 (三) 浪花無人島・白河堂至高 (四) 鳥取市叶三八一 (五) 大正3年11月18日 (六) 鳥取市賀露町五区 (八) 会社員 (九) 神も仏もあるかと戦後から変り (一〇) 以前は俳句・音楽鑑賞 (一一) 有 (一二) 昭和九年三月
- (120) 渡邊 三笑子
- (一) 真木武 (二) 春蛙 (三) 柿草庵 (四) 長野県小諸市赤坂 (五) 明治43年1月26日 (六) 長野県 (七) 国鉄職員 (八) 職業に貴賤なしとはよくだまし (九) 麻雀・野球 (一〇) 有 (一一) 昭和二年三月



末の子がふびんでならぬ共稼ぎ	同	他人の児を膝へ預りぬくいバス	同
遭難の柩へ馬鹿と泣きくずれ <small>受渡県</small>	川又 庸児	二級酒を特級壇へホームバー	同
真夜中を歩けば看板だけの街	同	日当りがよすぎ朝寝の出来ぬ愚痴 <small>香川県</small>	三井 酔夢
出札にからんだ酔が乗り遅れ	同	ぬか雑布三日坊主が顎を出し	同
下座から謡を出して見直され <small>笠岡市</small>	佐内 隆文	木の香りペンキの匂い落着けず	同
よくとれた写真娘は不満なり	同	飢饉編むお婆々に労務時間表 <small>声屋市</small>	里田一十
琴の音聞いているような福寿草	同	鉛玉かんで鳴鍋あじきなく	同
大根で儲けたという馬鹿笑い <small>兵庫県</small>	遠山 可住	本望でしようと舞台で死んだ <small>ダレヲモはめ</small>	同
熱いとこみせてチョンガを追 <small>まき</small>	同	孫の留守ゆっくり漫画読んでおり <small>大阪市</small>	三輪九文銭
結婚をする気の春の髪を替え	同	まっとうな事が若さの気に入らず	同
受験期の子へ足音も気をつかい <small>竹原市</small>	大洲大八洲	こりゃ好いと八百屋 <small>ラジヲを二度こすり</small> <small>金沢市</small>	河合卯生木
子沢山不遇の友へ目をつむり	同	春斗はラッパが欲しい程のデモ	同
役付に成って社宅へ庭もつき	同	宿題のようにには入試してやれず <small>貝塚市</small>	護川 梢月
老人へ二つ席空く美しき <small>福岡県</small>	山田 常楽	孤独にも馴れて個室の二年生	同
マージャンに占領された置炬燵	同	酒煙草止めてもテレビまだ買えず <small>七尾市</small>	松尾 秀峰
どうしても行くかと傘を渡される	同	買う程の小包料で送って来	同
日日好日孫と食後の指角力 <small>京都市</small>	大久保 和二郎	赤札の中に身内がある個展 <small>大阪市</small>	藤富 淀月

川柳雑誌社特製

投句用 柳 箋

一冊(五〇枚綴)三〇円
送料(一冊分)二〇円

(一) 渡辺五祥(二) 三笑子(三)

わたなべのぶよし さんしょうし

(四) 神戸市東灘区住吉町

川一三三九(五) 一(六) 東京

都(七) 会社役員(八) 一(九)

戦争は嫌や差し上げた児の高さ

(一〇) 長唄・小唄ともに名取

(一一) 有(一二) 昭和三年窪田

而笑子に師事

(121) 西 森 花 村

(一) 西森茂(二) 花村(三)

にしもりしげる かなん

(四) 大阪市東淀川区三国本

町三丁目三十一(五) 明治43年10

月7日(六) 大阪市大正区(七)

郵便局員(八) 一(九) 天と地

の間をひよこ駆け廻り(一〇)

読書(一一) 無(一二) 昭和十年

頃作句の記憶あれど主として戦後

(122) 山 根 白 星

(一) 山根博正(二) 白星(三)

やまねひろまさ しろせ

枕流子(四) 東京都港区芝二本榎

二ノ二〇(五) 大正12年4月1日

(六) 山口県光市室積町(七) 会

社員(八) (四七三) 一三七二

(九) 駈者の背へ左遷の才気うら

悲し(一〇) スポーツ・囲碁(一



正客の樟脳匂うお茶の会 同	お便所の掃除でいつかみとめられ <small>高知市</small> 須藤 俊江	ダンスではリード家では牛耳られ 同	折角逢えたが誘惑資金なし <small>八尾市</small> 吉田 博一	女房養えるほどの金で夜遊び 同	いつの間にか仕払いすんで淋し <small>伊丹市</small> 小川 静観堂	複雑な味で数の子をよばれ 同	出航へ淋しネオンは波に揺れ <small>玉野市</small> 小谷 仙山	思いきりやらせと若さ買ってくれ 同	欲望はないが色街あるいて見 <small>和泉市</small> 末田 晃康	倅はレジャーをうめる手内職 同	豊作の村を出て行く観光車 <small>松山市</small> 河本南牛史	観光は貯金帖とも相談し 同	大金はヘソの上なり寝台車 <small>福岡市</small> 本村珍ちく	ひらかなのように女椅子にかけ 同	玩具屋に手錠を売ってる世がこわ <small>高知縣</small> 山川 勝子	明日と云う日が今日雨を呑み 同
耳かきも買うて療養する気なり <small>西宮市</small> 白石 良圭	肺を病んで 同	手鏡の中の私をはげます日 同	ちゃんちゃんこ恩給で生き <small>仙台市</small> 平野 光道	なにもしてやれない親 <small>なまじ</small> と抱く 同	スイスイスーダララと治りたく <small>貝塚市</small> 杉本 一鶴	優勝馬カメラへ一声ないて見せ 同	入院中の句 同	妻が居てベッドの話題温まり <small>新居浜市</small> 小村 孝正	ようだいを電話で知らす回復期 同	満ち足りた顔で女は帯を締め <small>須崎市</small> 高橋 蟬蛇	新薬に迷いつくしてまだ癒えず 同	満で云う歳は野心をほのめかせ <small>西宮市</small> 沖吉 照児	病んでいて手形の日付丸暗記 同	天才教育して変人が出来上り <small>神戸市</small> 波多野 美由起	ようもこう捨てたものだと清掃婦 同	からっ風物乞う人に遠慮せず <small>大阪市</small> 井石 泰泉

スマートで
着心地良い



GOLDEN
O.S.K.の
紳士服

各地特約店に有り

- (一) 有 (二) 昭和十六年頃
- (123) 那谷 光郎
 (一) なたらまじ 那谷長次
 (二) みつろう 光郎
 (三) けいせい 那谷の雅号
 (四) 石川県加賀市大聖寺荒町四三 (五) 明治27年10月25日 (六) 石川県加賀市大聖寺菅生町 (七) 医師 (八) 大聖寺局六三 (九) 奥さんの酌ではなどと恐れ入り (一〇) 南画 (一一) 有 (一二) 昭和二十三年五月
- (124) 吉田 圭井堂
 (一) よしだたろまつ 吉田多良松 (二) けいどう 圭井堂



故郷の話題なつかし膝くずす	女子大の隣りで焼芋繁昌し	聞かず終いの女房の琴娘に譲り	此の年で夫婦が通う帰化夜学	新婚が同じ模様を着て歩き	心臓が騒ぐ病にとりつかれ	食い逃げを棚で見ている招き猫	回復期カロリーだけあつても足らず	消灯のベッドへ月が見舞に來	泣く武器を女は持ってよく使	花嫁修業柔道の初段持ち	義捐金端敷をつけてよく目立ち	肩たたく孫もだんだん欲がふえ	大学を出て常識をうたがわれ	人情のもろいが詐欺に引っかけ	公金をつまみ食いする金歯入れ
同	野村 利子	同	同	上田 紅溪	同	野口卯之助	同	永宗 宗義	同	山田 蛙木	同	村上 石峰	同	井上 旭峯	同
後家さんに巻かれて老妻妬かれて	髪型に既婚も寡婦もなく同居	仲人は年寄干支でききなおし	本論へ入る頃から眠くなり	上廻る悪智恵規則追っ付かず	妻の留守手酌が何かもの足らず	ふんばったチップが癪な二日酔	子の寝顔明日はやはり叱る顔	死んでなお金の工面で世話をかけ	ほどほどに親を心配させて生き	厄除けの虎からからと肩で鳴り	横顔の魅力アップにして撮らし	失恋をしてから金に執着し	すき間風入れて愛情確かめる	屠蘇なればこそ朝酒もめでたけれ	保守革新派手にピラ張る松の内
森本黒天子	高木繁太郎	三上 芙路	高木 涉柿	浅川 八郎	蔵本白梅子	同	中川 晃男	同	吉田 俊和	同	島田 雄峯	同	樋口 寿栄	同	堀 風仙洞

お知らせ
バックナンバ御入用の方は、往復ハガキでお問合わせ下さい。
川柳雑誌社

(三) — (四) 堺市浜寺昭和町
一丁三〇 (五) 明治35年2月15日
(六) 奈良県吉野郡 (七) 会社役員 (八) 堺③〇五四 (九) 家計簿をきっちりつけてめとらず
(一〇) 釣り (一一) 有 (一二) 昭和三年春頃

(125) 小西雄々

(一) 小西忠夫 (二) 雄々 (三) 豪雄 (四) 鳥取県米子市富士見町一三五 (五) 大正10年1月26日 (七) 国鉄職員 (八) — (九) ワイシャツを脱ぎつつ嘘をかんがえる (一〇) プロ野球ほかスポーツの観戦 (一一) 有 (一二) 昭和十九年十月

(126) 直原七面山

(一) 直原信春 (二) 七面山 (三) 夢美幻詩 (四) 岡山県久米郡久米南町下弓削四五 (五) 明治45年4月6日 (六) 現住所と同じ (七) 国家公務員 (八) — (九) 未亡人一度落ちれば瀧に似て (一〇) 映画・旅行 (一一) 有 (一二)



人間の弱さ開業へまねき猫 神戸市 吉田 隆史

盗作じゃないかと選者ノイローゼ 奈良県

植田 明美

感激をしたような顔で画廊出る 大阪市

福井野迷路

鯛焼いて待っていたのに入試落ち 布施市

物部 好栄

法要で集めた金で屋根を替え 兵庫県

斎藤たけお

ふるさとが同じで恋が芽生えだし 東京都

園田 節子

免許証忘れ裏道よって行き 岡山市

行吉 照路

失職してから雲見る日が多く 大阪市

雲井 良一

共稼ぎ市場でぼったり顔が会い 岡山県

岩道 博友

気軽にと三つ指ついてもてなされ 大阪市

谷口 文三

口ばかり達者になって退院し 守口市

樋口 一峯

暗くするだけのムードで客を寄せ 奈良市

斉藤 武夫

成人式や子あずけて来たも居り 笠岡市

谷本鈍愚坊

コマージュル間によれ走り込み 大阪市

山崎佳津子

眠むたくて眠むたくてと妻肥り 福岡市

本村 喜代

社交家として手八丁口八丁 松江市

岡崎 祥月

口下手が額の筋でものを言い 玉島市

水粉 千翁

我儘もよし円満の粹の内 倉吉市

奥谷 弘朗

階段を上った団地の乳母車 大阪市

西本 保夫

番傘元同人高橋唯義さん急逝

石田 古石

奥さまが立つのを待って借る話 秋田市

宮川 珠笑

九里丸に時蔵それにあんたもか 大阪市

岡崎 雪美

ためろうてためろうて云う初小言 岡山県

鳥取 周甫

酒飲めぬ男と見えぬ交際家 松江市

岡崎 雪美

暖房の店で夏物見本市 金沢市

根上 杏花

雑踏に孤独しみじみ噛みしめる 豊中市

稲増 久雄

おしえたら教えた智恵でしてや 藤原市

川岡露眼子

卒業は証書で肩を叩き合い 羽咋市

三宅 ろ停

親指が素通りさせぬパチンコ屋 姫路市

隠岐 不酔

委員長見廻しながらホープ出し 津野市

鈴木 二文

今年こそ一俵増やす麦を踏む 玉島市

田辺 好女

くちづけの丘はダンブに奪られ 松江市

宮本 竜作

遣えませぬ児に鉄砲だ自転車だ 大阪府

石田 新石

ミの青春 たてものさかても逢いに行き 奈良県

吉田 房江

昭和二十二年三月

(127) 中村九呂平

(一) 中村薫 (三) 九呂平 (三)

ゆたか (四) 山口県下関市上新地町二四四一 (五) 明治40年7月23日 (六) 山口県下関市新地町四五 (七) 国鉄 (八) (九) 人間の価値を知る日の釣静か (一〇) 観劇 (一一) 有 (一二) 昭和二年七月

(128) 水谷竹莖

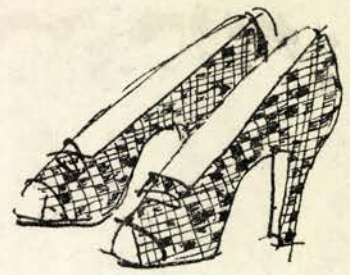
(一) 水谷五郎 (二) 竹莖 (三)

竹莖山人 (四) 大阪市阿倍野区文の里四丁目一五四 (五) 明治34年8月22日 (六) 大阪市 (七) 公務員 (八) 天王寺 (771) 四二三 (九) さしあげた傘が追抜く戒橋 (一〇) 演劇・日本舞踊 (一一) 有 (一二) 昭和十四年三月

福壽司

心斎橋筋大丸前

電話(271)三三四四番



私の見たハワイ (一)

若本多久志

うじて諒解出来たことは「自分の夫もシカゴのライオンズメンバーである」ということと、「二三年前に香港廻りで日本東京へ行った」

「フジ山が美しかった」ということだけ。あわてた私は、その辺に通訳してくれる者は？と見渡すが、皆、目の色の変った男女ばかり、途方にくれて、ジャパニーズスマイルよろしく、

「ノオー、アングラスタン、ユア、セエイング」とやったのが益々悪かった。「オウ！」と言いながら今度はスロースピーキングでおいでになった。

ハワイとは

我々がハワイについて知っていることは、太平洋戦争に於ける真珠湾のこと、常夏の国、夢のハワイアン、フラダンス位なものだったが行って見て余りにもその認識不足に自分ながら呆れ果てた。ハワイ州は八つの群島から成り、合せてその面積は、我國の四国ぐらゐの大きさだということ、一番大きい島がハワイ島(全面積の六割強)でここには有名なキラウエア火山——昨年四月大爆発した——があり、一帯の高原は国立公園園になっている。

一九六〇年、ハワイがUS Aの一州として自治独立してから、急激な発展を遂げ、特に観光施設に於ては実に世界のハワイ——だと聞かされ、商売柄是非、行ってみたいと思っていた処チャンスに恵まれて、去る一月下旬の約一週間、慾張ったスケジュールでハワイ七島をとび歩いたその、珍談、奇談や、感激をたどたどしく、思い出すままに綴って見た。

会話は苦手

先ず外国へ行くということになると

「話せるだろうか」

「聞けるだろうか」
の不安が頭に浮かぶ。若い人のようにリンガフオンで練習

してゆくという根気もなく、「ハワイは日本語で大体、用が足せる」と言う、友人の話を唯一の頼りにし、それに自分の従兄夫妻や、ウイロー川柳社の方々も多数おられることだからと、心丈夫に羽田から、バンアメリカンのゼット機に乗り込んだ。

処があいにく、その機のホステス、三人の内、怪しげな日本語を話せるのは一人だけ、それも一定のアナウンスだけで、用を足して貰うのは皆英会話、辛うじて単語と手真似でやってのけたものの、前途すこぶる不安で心細いこと夥しい。

案の定、第一の遭難は、ワイキキのリーフホテルでロビ

ーの売店前。つかつかと寄つて来た金髪美人が私のネクタイを指差しながら、「ユウ、ライオンズメンバー？」と聞いてきた。——註、我々国際ライオンズメンバーが外国へ行く時、会員バッジやネクタイ等をつけてゆくと思わぬ優遇を受けることがあるという先輩の経験談で、私もそのマーク入りのネクタイをしめていた——

「ベラ、ベラ、ベラ」

と金髪さんが捲くし立ててく

るが、サッパリ解らない。辛

く求めて、

「サヨナラ」

主都はヒロ市で、私の行った時はまだ、昨年のチリ津浪のツメ跡が生々しく所々に残されていた。

全島の人口六万五千人、ヒロ市には二万五千人の内日系が一萬五千人位と聞かされた。この島へは日本からの訪問者が珍らしいのか、キバ放送局、日本語主任のオユナ敏子、という婦人がホテルへ訊ねて来て、訪布の目的や、感想などを聞いて、録音し、最後に

「お国の喉自慢を」ということで、てんでんのおはこを唄った。この録音は翌日午後の日本語放送で、日系人の郷愁を慰めることが出来るのだと聞かされ、一寸いい気持ちになった。

ハワイ島に次いで大きいのがマウイ、三番目がオアフ、次がカワイ、モロカイ、ラナイ、ニイハウ、外に小さな無人島が一つある。

ハワイと言えばホノルルを語ることになるが、ホノルルはオアフ島の南岸にあり——真珠湾もこの島内——州政府

の所在地になっている。オアフ島の人口が四十七万で、その内の三十五万がホノルル市民だということから、ハワイ州人口六十二万の過半数が首都に集まっている訳で、その殷賑ぶ



布哇高等裁判所構内のカメハメハ大王銅像前の筆者。
(カメハメハ大王はハワイを統一して初代の王位についた人)

りも領かれる。

氣候は、所謂、常夏で、大

体、日本の六月下旬から七月上旬の暑さ。然し湿気が無いから余り汗をかかないので、下着も汚れない。我々は、公式の会合に出席する時以外はアロハシャツ一枚の着たきりすずめで通した訳、ところが夜になると、九月上旬の涼しさになり、ホテルのベランダ

で、持って行った浴衣を着て、ヤシの木の間に、日本と同じ月を眺めながら、アサヒビールのホロ酔に各々が故国を偲んだ夕涼み風景は忘れ得ぬ思い出の一つである。

日本人の偉らさ

今度の旅行で一番感激したことは、外国で日本人（日系市民）がこれ程尊敬され、母国から来た我々に肩身の広い思いをさせた驚きであった。

日系人は州人口の四割を占め、全産業の推進力となっており、政治に、立法に、経済面にそれぞれ指導的な地位に

ついている。

その一例を挙げれば、国会の上下議員三名中、一名の日本人、州議会議員七十六の内三十六議席は日系人で占められている。又、ホノルル市会議員九名中、六名、三郡の参事、二十名中、九名、同行政官十二名中、四名が日系人、司法畑ではたった一人の大審院長を初め、大審院判事五名中二名、巡回裁判所、区裁判所の判事三十六名中、十四名が日本人、教育関係では、州立ハワイ大学——学生六千名、その構内に学生の乗ってきた自動車が一五千台並べてあったのには驚きの外なかった——その理事、教授に十名の日本人がおり、公立学校二百十五校中の校長八十八名までが、我々と同じ血の流れる日本人であるという現実を見聞して、目頭が熱くなる程の喜びを感じたのは一行中私ばかりではなかった。

この公学校の外に、週五時間授業で、修業年限十二年

という日本語学校が百三十校もあって、あらゆる階級の市民が熱心に、日本語を習得しているという、この事実は何を物語るものであるか、私は深く考えさせられた次第。

ある朝早く、美術館前の公園を散歩していた時も、フィリッピン人の勤め人らしい二人づれの若者が、私とすれ違いに

「グッドモーニング」と町ねいな言葉をかけて行ったが、しみじみ、誇り高き民族の喜びを味うたことであつた。

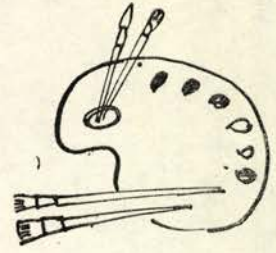
——次号につづく——

今回私の訪布に当り、ホノルル空港までわざわざお出迎えを頂き、その上盛んな歓迎句会まで催して下さいました川雑ハワイ支部——ウイロ一社の方々に、心から厚くお礼を申し上げます。

不約会副理事長

若本多久志

評句 リレー



大 阪 市
東 京 都
長 野 県
大 阪 市
宇 部 市

西 いわを
阿部佐保蘭
高峰 柳 児
長谷川三司
津 秋 六 花

汽車通る前で悠々用を足し

可住
いわを―田舎道か郊外での情景とみえるが「悠々用を足し」と纏めているところ、春から夏への気候のよい時期とも思われるが如何か。

佐保蘭―御説の通り気候のよい頃と思います。下手すると下品になり易い処を下五で軽く逃げています。

柳児―敢えて汽車と相対しての動作ではないがよく見受ける風景である。見る眼からは或は悠々に感じるかも知れないが、当人はこれらえにこらえての処置乍ら、その安堵感から辺りを眺める余裕さえ得て、これが悠々と感じさせる焦点となっている。

三司―これなどよく見かける風景だがこれは写生吟でなく句主自身だらう。

私の句に「春の雲わが放尿に影落す」と云うのがあるが、これなどはズバリ言い切ってしまったが、句を上品に用を足しと下五で逃げた所などなかなか良い。

作者は誰はばからず大地へ悠々と生理現象をはたした愉感だらう。下五で生きた句。

六花―レールと云う決った道を走る汽車が上五にあるから、下五の悠々が生きている。これがダンブの迫るような上五になったら、下五悠々が死にはすまいか。上五の汽車通るが案外きいている。

いわを―こうした句想は余つ程美的に扱わないとオグレッツに陥入りやすい嫌いが出来る。たとえ句主自身だらうが、写生吟であらうが。

佐保蘭―菊池寛の小説の中には小便をする場面が出て来ないが、芥川竜之介の小説にはそれも出て

来ると云うことを聞いたことがある。それぞれの性格が出ていて面白いと思う。川柳が生活詩とすれば生理現象も勿論その中へ入って来るので、詠っていい訳だが、詠い辛いものである。その難点を突破してある程度成功した句である。

柳児―狙った処を表現の巧みで手際よくまとめあげ、情景そのものに露出的な感情が湧かない。

三司―下手をすれば愚レツな句になりやすい事をうまくまとめ、読む人に嫌な感じをあたえないお手柄は買うべきでしょう。が余り句にすべき事柄ではない、こんな句は短冊に書けない。

六花―写生でなく本人自身を句にしたのだらう。又こらえこらえての放尿でなく、ぼかぼかした暖い春ののんびりした気持ちから知らず小便したくなったのではなから

うか「悠々」がこう感ぜられます。下五用を足しには文句なしでしょう。

うか「悠々」がこう感ぜられます。下五用を足しには文句なしでしょう。

愛してなんかいません 刑事部屋 雄水

いわを―本当に愛していないのか又は心の中では愛しているのか、刑事にも判断がつき兼ねるので凡ゆる角度から尋問を繰返しているが、白状しない女性の強情さを詠っているのではないだらうか。

佐保蘭―重なる尋問に愛する男の為と一つには刑事への反抗心から、心にもない嘘を云う女性の複雑な心理状態から出た言葉と思われるが、この句の上では女が何をやったかが判然としない恨みがある。もう少し想を抜けて私なら仮にこの場の状況から女が愛する男の為に誤って人を傷つけたシーンと思ひ浮べ〃傷害へ愛否定する刑事部屋〃とでもしてみる。

柳児―一読男女関係のもつれがその筋にまで及んだことは判る。ただ女の言い分が否定的で痴情の果ての波乱にしても、対する男の立場が鮮明を欠いている。構成としてはかたくなな刑事部屋に色っぽさを添えたままとまりにもすれば惹かれる句。

三司―私は刑事事件の参考人にならうか「悠々」がこう感ぜられます。下五用を足しには文句なしでしょう。

乾杯！

気分よく
お酒を薬
しむため
お酒に弱
い方も
強い方も
リポコールを
お忘れなく
悪酔・二日酔を防ぎ
肝臓障害を防ぎます
●強肝と若さと栄養に

疲勞・体力増強・ニコチン中毒

リポコール

武田薬品

呼ばれた女と見たい。犯罪の裏に女ありで刑事がたまたま捜査線上女との交遊関係が出て来たので証拠固めに女を呼んだが、知らぬ存ぜぬの一点張でついにあんな男愛してなんか居りませんと云い切る所などパーカアルサロの商売女。うす暗い刑事部屋での女と刑事の回答がこの十七字で結構芝居の一場面が想像できる。句の仕立て方など十二、五とした所などこの場にふさわしい。

六花―終戦後の男女は軽い気持ちで恋をするようになって来たの

で、一寸した刑事事件での参考に呼ばれての女の本心ではないでしょう。弱い動物程ドタン場になると義理も人情もなく、自分を守る事に執念する事は、外地での避難民生活時代に、嫌という程見せ付けられているので、人間の薄情を句主は云いたかったのではないだろうか。

いわを―此の場合刑事と女が、対立した空気に追込んでみるとよい。僅か十七字句に纏めただけに其の内容は知る由もないが、そこに含みのあるところがみえる。勿論刑事事件とみてよいが、女性の心理と云うものが或る場合反対の言葉ですらすると平気で、述べてしまうことがある。こうした面で、句そのままよいと思う。

佐保蘭―最近の刑事部屋をよく知らぬが、女のヒステリックな声が聞えて来るような気もする。柳児氏の云われる刑事部屋に色っぽさを添えた手柄は私も認めるが、それ以上を求めるのは私の欲ばかりであろうか。十七字の枠の中で川柳する難しさを痛感する。

柳児―事ここに至ったいきさつはとにかくとして、句主は捉えたこの色彩的な対象を強調しておき、観賞の立場もそれを味わえる。

三司―今の刑事部屋も昔の刑事部屋も余り変らないと思うフチの

ない畳に経机のような机が一つ他に何んの飾り気もない寒々とした部屋に、愛を口にしているから若い女でしょう。崩れ落ちた緋ぼたんのような女の顔だけが青い色彩的に見れば、灰色と赤と青でしよう。この句から色っぽさ(情的な)を見ようとするのはむりでしょう。この句はこのままで良いのではないでしょうか。

六花―軽い気持ちで恋をし、又軽い気持ちで心と反対な事を云うこれがアブレの心としても此の女やっぱり商売女に受取れる。こうした女心を刑事部屋にもって来た処が良いと思う。これが刑事室だったら又別だが。

○ 警棒のような洋傘ぶらさげ

文月
「警棒のような」との擬人法で綴った軽い写生句である外には何の新鮮さもない。

佐保蘭―晴雨兼用の傘をぶらさげて来る男を見て、あれは確か何処かで見たと警棒を思い浮べて詠った句。警棒のようなが句の山所謂川柳の見つけ所である。

柳児―前記二氏のお説の通り軽いまとまりで、強いて詮穿をすれば警棒にある厳しさと邪魔物扱いに持ち歩く洋傘とを対照した狙いが本命で、ぶら下げる共通性乍ら

そこを何か訴えている意欲がある。

三司―折畳式洋傘をぶら下げて歩くような男に余り鋭い男はいない。それを作者は警棒と見たのだからが警棒のようなとかぶらさげてとか句がだらだらとしてまとまらがない。見たもの聞いたものがみな川柳になると云う見本のような句。

六花―此の男確か大男のように思われる。折畳式洋傘をぶら下げた処があまりにマッチしてなかったので警棒にもっていったのだろうが、これでは三司さんの言われるように見た物川柳の感がしますね。

佐保蘭―担当者から存分な批評をと云うご註文なので蛇足と知りつつ書かして戴く。私は正直に云って川柳の分野の中にとりわけ激しい世情の毎日を送っているだけに、こんな軽い穿ちの句もあっていいと思う。いかめしくない男だけに、いかめしい警棒をもって来たところが面白い。

柳児―主材が主材だけに表現もそれに歩調を揃えて緩慢さである。警棒にある硬さの性格と、登場人物の人物とを取組ませた手法。

三司―皆さんの批評にまかして置きます。穿ちも川柳の一要素ですが、安っぽい穿ちは「そうですか」川柳になり勝ちです。作者は

洋傘を警棒と見た、ただそれだけで穿ちにしては安っぽすぎます。

警棒は常に手に持つものでなく腰にぶら下げて持っているものですから、手持ちになった傘を邪魔がって腰にでもぶら下げていればまた別な人物の面白さが出ましようが、

六花―傘を作句したのでなく警棒の物足らなさを傘にもって来たのとして見たら、又違った見方が出ませんか。私には洋傘をぶらさげた間抜けな大男と同じに力のないポリ君が頭に浮んで来て意外な穿ちを感じに気づきました。

★ ★ わかっちゃいるけど 辞書を持って 歩こう

菊沢小松園氏が選をされたとき、集句の中から相当に多い誤字を発見された。

氏は「川柳人の常識として、誤字はでうるだけ避けてほしい」と、のべられた。文芸人が辞書を持って歩くということとは恥かしいような気もするが、だからといって誤

字を書くよりマシのようにおも

う。難解な文字を書かれたため、印刷所に活字がなく校正が遅れたこともあるので、なるべくなら当用漢字でお願いしたいものである。糸へん、言へん、子へんを同じ形でくずすクセのついている人がある。これはなかなかおるものではないが、ご自分で書いてもう一度読み直していただきたいものである。

これはよその吟社のはなしだが、ある老大家の句があまり抜けない理由の一つに、この老大家の遠筆があげられているのだ。問題は読めぬ選者の未熟さか、句主の洗練されたくずし文字によるかである。ほくなども文字にはセンゼン弱いのでこの選者に同情したものである。

(不二田一三夫)



「お買物」
は近鉄で!!

近鉄
アベノ上 8331
アベノ下 3331



春日局

富士野鞍馬

徳川家康の長男信康は、織田信長の圧迫をうけて、天正八年、二十一才で自殺し、二男秀康は、豊臣秀吉の養子となり結城氏をととなえ越前に居たが、大阪の秀頼を擁護したので家康に毒殺された。三男秀忠が二代將軍である。秀忠の長男を竹千代といい、二男を国千代といった。竹千代という名は家康の幼名である。

秀忠の夫人は、二男国千代に三代將軍を継がせようという底意があり、その周囲は動揺していた。長男竹千代の乳母春日局は、ひそかに伊勢參宮と称して駿府へ行き、家康に面会してこれを訴えた。家康は、余事に托して、急ぎ江戸へ行き、「竹千代は主なり、国千代は臣なり。」とはっきり裁きをつけたのであ

を下座に於て餐せしむ。介弟
氣阻み、衆惶駭し、浮議始め
て息む。」

と書かれてある。これが小説、劇にもなつて、川柳もまた、いろいろに詠んでいる。

表向き伊勢で駿河へ抜参り

(タル一五一)

お伊勢様鉄打で売る忠臣さ

(〃二九)

春の日に抜参りする大どしま

(〃〃)

女にまれな鉄打で伊勢参り

(〃一一四)

忠義さは鉄打で行くぬけまい

(〃二四)

古米糶伊勢へ春日の抜参り

(〃一五四)

駿河まで行くは大きな抜参り

(〃二三)

「抜け参り」というのは、親や主人に許可を得ないで、こっそり家を出て、伊勢大神宮に参拝すること、よく若い衆がやった。春日局が、駿府(静岡)に居る大御所家康のところへ訴えに行くのを、表面は伊勢參宮といつて出かけたので、それになぞらえて作られている。「鉄打」は上流女性の乗る駕である。

生身の太神宮へ春日行き

(タル五二)

神へ忠義なお局も春日なり

(〃八二)

補佐の神補佐の局も春日也

(〃八九)

すくな道伊勢へ春日の局立

(〃一〇六)

駿府の下乗に見覚えぬ女中裾

(〃一六一)

江戸時代は、家康を東照神君としていたから「神」として詠まれ、

「隠密を富士の麓で局いひ

(タル三〇)

「隠密」オンミツは探偵のこと、富士の麓は静岡をいつたのである。

駿河から御言葉おもき御順道

(タル九四)

竹千代を三代將軍にするこ
とが、家康の東下によって確
定した。

駿河細工で竹の世にあそばさ
れ

(タル一〇一)

駿河は今でも竹細工が名産である。それにかけて家康の措置をたたえている。これも春日局のはたらきである。伊勢のはなしをきかれ局はこまり

い局である。

春日局は、明智光秀の股肱齋藤利三の娘で、お福といひ稲葉正成に嫁して三子を産み、後、竹千代の乳母になつたのである。

名高き局神僧に囲はれる

(タル一一六)

という句があるが、別に囲われた訳ではなく、品川東海寺の沢庵禪師に帯依して居たことを洒落て詠んだもので、その修養が局の衷誠に底力ともなつたのであろう。

局の意志の強固であつたことは、家光が重忠の時、東照宮へ、身をもって替らんことを祈り、自身は病氣になつても、薬、針、灸を用いないことを誓つたので、家光の本復後もなおその誓願を守り、六十五才で天寿を終るまで、薬餌は断じてしりぞけたということである。

寛永二年には、湯島に麟祥院を建立し、二十年(一六四二)九月十四日に終命して、その寺に葬られた。法名は麟祥院仁淵正義大姉。「江戸歳事記」には、一月と七月との十六日に「湯島麟祥院にて従二位春日局影堂開扉御木像を拜せしむ」と記されている。

感 雜 号 四 月

編集局の

机上から



あ の 年
こ の 年

毎月のことだが、たとえば四月号にかかると、最近の四月号の合本をバラバラくって企画をたてるのが一月の下旬だ。

昭和29年をのぞくと、巻頭読みものに「いける口の人々」の座談会が光っている。路郎、鮎美、生々庵、貴山、司会春葉諸氏という豪華メンバーだ。

麻生路郎句集「旅人」出版記念会の記事が春葉氏のペンで紹介されている。中間読みもの「香蘭の

將軍」の東野大八氏が今日なおもずっとご執筆たまわっている。

昭和30年号では原稿が多かったせいも、集ったものだけで編集されたらしく特に四月号のムードを盛ってはいないが、阿達義雄氏の「江戸川柳に詠まれた市川団十郎(三)」と富士野鞍馬氏の「壇の浦(上)」の古川柳研究の原稿が二本立てで光っているほか、「一路集」の選者須崎豆秋氏、三嶋美笑氏の故人組みの雅号がある。36ページ、40円。

昭和31年の四月号から、梨里編集長に変わってほくが路郎主幹のお手つだいをする事になったが、前田雀郎氏(故人)の「久良伎先生伝補遺」は圧巻である。「ぬかぶくろ」の安川久留美「俳緑柳縁」の前田伍健両氏とも故人となられ、柳界の地図の色が変わりつつあるようである。「BK趣味のしおり・放送休止」となったBK川柳の会の消滅始末記を路郎主幹が書いておられる。この号から本文の用紙が印刷紙となって従来米のガラ紙から面目一新したわけだが、このため「番傘」や「ふあうす」と誌名その後ガラ紙とサヨナラをしている。評判読みものの

「女流作家訪問記(14)」は「麻

生梨里さんを訪ねて「丸尾潮花氏の手八丁口八丁の活躍時代である。

昭和32年では座談会「紫香を語る」を路郎・葎乃・潮花・いさむ諸氏が大いにしゃべっている。「川柳家の二十四時」今月の人々は延原句沙弥(故人)、中島生々庵・西島〇丸(故人)諸氏でこの企画は柳界の話題になったものである。句集「私達」出版記念会の夕の記事や、後藤梅志氏の「私達から」それから路郎主幹の「久留美君の事ども」船木夢考氏の「久留美君を憶う」等、故安川久留美氏を悼む記事など多彩なもので40ページ50円になっている。

昭和33年では表紙の2のページが色刷りになって、横組が左からになっているのが目立つ。石原青竜刀氏の「泥沼から脱け出す道」や、「リレー句評」で梨里・きさ子・小石・富士子諸氏の女流作家が執筆陣に花を添え、長野文庫氏の「入試と川柳」など好読みものが多い。

昭和34年はまず「皇太子さまの御成婚を祝して」と題して路郎主幹が書いておられる。主幹の「新川柳鑑賞」も六六二回とある。森下冬青氏の「批評に温かさを」や

高鷲亜鈍氏の「ロマン風の随想」ほか東野大八氏や富士野鞍馬氏はどの年のどの号を開いても、かならずご執筆たまわっている。交通事故でなくなった「内藤草一郎をしのぶ」を麗花麗・暁舟・柳葉・快夢起・平八郎のハワイ組諸氏が執筆。長い間句会を光明寺でもっていたが、この年から文芸座別館にかわっている。48ページ、60円

昭和35年では山路閑古氏の「川柳を放送する」戸田古方氏の「絵と川柳で表現する歴史」や、路郎賞受賞作家の特集で一善・水客・無鬼・いわを・狂二・晃諸氏が執筆している。48ページ、70円。

昭和36年から「新川柳鑑賞」が「名句と難句」とタイトルが変わったが主幹の健筆はますます冴えている。「東京座談会・柳界あれこれ」は伊志田孝三郎・富士野鞍馬・塚越達亭・高須亜三味というトップレベルの人たちだけに、堂々本号の柱となっている。「花と酒と女と」へ没食子・圭井堂・多久志諸氏が執筆。句会場が関西会館となる。

わずか七、八冊をのぞいてみても、36ページから48ページへと前進をつづけている。これは読者のご支援のたまものである。(F)

働く人の保健剤

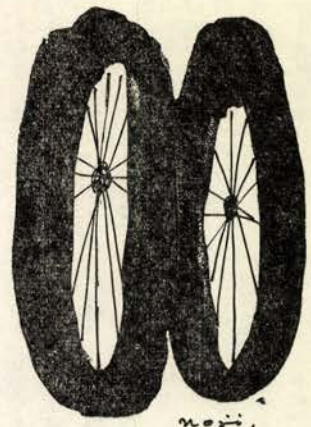
8種の必須アミノ酸・9種のミネラル・12種のビタミン
これら29種の栄養を合理的に配合した新しい栄養剤です
だるい・疲れる・元気がない・こんな方にとにかくお試し下さい

モリアミン



森下製薬株式会社
大阪・道修町
100番・100円





みち

戸田古方

余程石がすきな人とみえて、書

斎には本州最北端の下北半島の盛
台下の石が、アルプスの剣岳の頂
上の石とならんておいてあるそう
です。土産は石ばかりで、教がふ
えると持って歩けず、送るんです
が、運賃がかさんでねと笑ってい
ました。

ここからも、また、わたしはお
くれて、ひとりになってしまいま
した。

ところが、これからさがが大へ
ん。いよいよわけわしくなつて来て
岩も大型になるのです。半ばくち
かけた棧道をおそるおそる渡りま
した。落葉が重なって足さきに不
気味な弾力さえ感じるのです。

「蜀の棧道ものならず」、とは
「箱根八里」の歌に出て来ます
が、蜀といえは中国、四川省。楊
子江が四川盆地から、三峡という

けわしい岩地をつききったあたり

に棧道もあるんじゃないですか、
河にとつても河のみちは容易でな
く、河を利用する人間にとつて
は、又、それにも増してきびしい
ようです。この三峡は大陸転戦四
年の日本軍閥もよう越さなかつた
のであります。棧道のためだけに
はありますまいが、そうまでした

大陸の戦いも、あのひろさのなか
で、点をつかみ、線を引いたにす
ぎなかつたのでした。

鳳来寺山のみちも、思いがけな
く、棧道にぶつかるほどの岩ばか
りのけわしい道でした。中学生の
一団又一団が陽気に声を揃えて歌
いながらおりて来ました。それと
すれちがう度に、道のかたわらに
立つてみちをゆずりました。お

かげで、先にいった道連れたちに
気兼ねなしに息を入れることが何

べんもできました。中学生たちは

リスか、ウサギのように岩を越え
ながらとんで現われ、とんで消え
ていってしまいました。
土は少く、ほとんど岩から岩へ
足がかりができていました。この
へんから上りだけではなく、時々
平坦なところは、下りさえあつて
どうやら尾根に近づいた感じで
す。

しかし、下りは年のいった私に
は上りより骨が折れました。飛ぶ
どころか、いちいち岩に腰をつけ
て、すべるように次の岩へ足のつ
くのを見きわめねばなりません
でした。

しかし、若い人には若い人の、
老人には老人なりの骨折りがうれ
しい汗となり、それなりに楽しい
ことでした。身体を張ってこそ何
かが学べる気にもなるのでした。

東海道へさえくれば東海道が見
られるとぼつかり思つて出た旅
が、それがどんなに無理な願いだ
つたかはすぐわかりました。
通りすじにあたる宿場の名ぐら
いはおぼえて来たのでしたが、そ
れをいよいよ見きわめるには足に
まかせて歩くより手がなかつたの
でした。それをバスから坐つてい
て見ようなどは虫のよすぎる話
でした。バスではおおかた新道ば
かり走つて、はるかにつづく旧宿
場らしい家並をみつけたにすぎま
せんでした。バスにのつてはバス
のみちがあり、私たちがはつきり
二十世紀の人間であつたことも知
らされました。歴史は文字を通し
て過去にふれることが多いので
すが、やはり、こうしたからだで
経験することなしにはほんとのこと
に近づいて行きにくいものだとい
はされました。ただ考えているよ
りずっと科学的な探究の仕方だつ
たのです。

道が尾根に出てしまつて、坂が
なくなりまして、やつとホッ
としました。

眼の下に鳳来寺の門前町がみえ
て来ました。あすこの町へまで鉄
道がきているのです。そしてそこ
から千八百の石段がつづいてい

のです。もう来たなという安心感
が急にでてきます。

ずっとひとりでしたが別に淋し
いとも、心細いとも思いません
でした。それは次から次へと白ベン
キでかいた道標があつたからでし
た。実に粗末なもので、岩や立木
にじかにかいたものでしたが、親
切で正確でした。勿論一本みちだ
つたからかもしれませんが、一本
みちとより印象づけられなかつた
のはその白ベンキのせいだったか
も知れません。

点がかうくれば線になります。二
点をつなぐ線は大小にかかわらず
みなみちということができるとし
まう。

みちのはじまりはただ動いたあ
とというだけで、袖みちとか熊み
ちとか猪みちとかいったものです

事務用品全般

事務用スチール家具

株式
会社

心齊橋クニヤ

心 齊 橋 北 詰

電(251)4740, 4741, 4742

が、同じところを仲間がくりかえし通っているうちに踏みかためられていよいよみちらしくなってくるのです。しかし、みちがみちとして大いに利用されるためには人手の加わるのは当然です。

歩きやすくするためには砂利やガラを敷いて足で段々に踏みかたまるのにまかせせる原始的なものから、新聞紙一枚のひろさの舗装に数千円以上をかけるところまで発達してきました。しかし舗装の歴史はずい分古いものでローマにも、もっと古くインド先住民の作ったというハラップバやモヘンジョダロの町にも発見されて人々を驚かしています。

尾根の平坦路へきても白ペンキの道しるべは同じようにつづいていきます。

校道であるにしても中部日本の山みちをあるいていますと、もつといろいろ、みちのことと思うのでした。長野県のと田峠は石器人の石鏃につかう黒曜石の産地でした。しかし黒曜石の分布は和田峠を中心として、日本海にも太平洋の岸にも及んでいます。みちは交易、交換のみちであり、新坂の町がそうであったように山と海や平野の物資が互に流れたものでし

た。こうした山へのみちは塩のみち、魚のみちとよばれていました。

今歩いているのは山寺へのみちで塩みちでも魚みちでもありませんが、よき古き時代には信仰のため千里を遠しとせず、都会の中やぐるりにも、お大師さん詣りや御祖師さん詣りがあり、旅らしくなると、全国より集まる伊勢まいりのみち、巡礼同行二人の菅笠でなじみの四国八十八ヶ所や、金比羅詣りのみちもとのつて来ました。それとともに幹線としての東海道、中仙道は当時異邦人の目をみはらすほど立派な道だったとい

います。

尾根のみちがつづくかぎり、歩きのにすつとゆとりが出て来ました。ゆとりが出てくると今まで気づかなかった小鳥のさえずりにも耳をかたむけます。

なく沢山の種類の鳥がいるときいています。だいたいこの鳳来寺へのみちも、今では信仰より、仏法僧をきくための人々だけに利用されているようにさえ思われるんです。

さてその仏法僧ですが、その鳥のなき声が「フッポーン」ときこえるからで、本名は何かとコーハズクとかいうふうらうの一種だそうです。

鳥を通してきかせてもらう「フッポーン」ですが、それは仏教では大へん大せつなことばなので、仏法僧は三宝と申しまして、

仏と法と僧の關係は丁度、鳳来寺をめざして、私はこの四キロのみちをここまであるきつづけて来ました。仏は高貴で理想の目標であり、法は方法の法、法則の法であり、僧は法師の僧、今目の前になおつづいている白ペンキの道しるべです。私はこの白ペンキのおかげで迷いもせずここまでくることができました。どうやら鳳来寺も近づいて来たよう

です。

地球のまるいということを一つの手がかりとして、その一念にみちびかれて、アメリカが見つけられましたが、それに似たやれやれという感じですよ。

お寺はこの真下らしいです。下りがけわしくつづきます。盛んに尻をつけて一足一足ふみしめながら下ってゆきます。

その足もとで雲でもわいてくるように嬉々とさざめく子供たちの声がしてきます。

鳳来寺の宿坊がみえて来ました。(完)

若本多久志氏 撮影・監督・主演の 「これがハワイだ」

若本多久志 氏のハワイみやげである。ミリ映画「これがハワイだ」が、千日前自安寺の三月句会で封切られた。

総天然色豪華版で、撮影



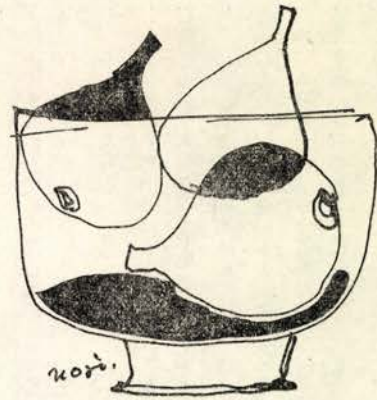
お買物は… 清く 明るく 美しい



大阪梅田・水曜定休 阪神 電大代表(36)1201

封切

(F)



手酌

西尾 葉選

一悶着付ける気手酌であびて立ち 博友
披露宴手酌のくせが出てあわて 弘道
春の夜を恩給ぐらし独り酌む 光道
セールの孤独手酌の旅の空照 照見
孫膝に片手は猪口を酌ぎこぼし 光郎
一悶忌その淋しさを飲む手酌 鶴汀
売れっ娘に惚れて手酌で待たされる 同
すねているように手酌のんでおり 九文銭
手酌の方が気らくときがらせる 芙蓉路
定年が一人手酌で飲む場末 どんたく
老らくの手酌一本保健剤 繁太郎
手酌には九ちゃんの唄気に入らず 八九寸
末席は手酌同士で馬が合い 圭井堂
乾杯へ末席手酌で立ち上り 宗太郎
二杯目からは手酌で還暦達者なり 初甫

路

集

手酌する顔はチップに縁がなし 和三郎
流行らない筈だと手酌から苦情 九呂平
手酌して残り少ない命です 涼髪
片隅の手酌ひとくせある目つき みのる
スタンドへワザと届かぬマダムの手 永安子
徳利をふって手酌は飯にする 晃男
手酌でも特級は特級の味であり 杏花
手酌で考える金儲けは高が知れ 雄声
一二杯手酌でやって息をつき 美由起
普茶料理手酌で庭の苔をはめ 蛙水
和尚さん手酌で酔うた山の寺 旭峯
胡麻することも知らずに来たこの手酌 迷句
手酌で頂いていますと膝揃え 三角坊
手酌する父宿題の字を教え 卯之助
晩酌の手酌が孫にもなめさせる 古心
六十円の酒は手酌の味になり 孝風
出戻りの娘が手酌へ酌いでくれ 十九平
心得た女将一本おいてゆき ひか平

同棲

田中烏雀選

酒のみの口は手酌の味をほめ 雪美
手酌で待つ足音は遠ざかり 芙蓉路
手があいていても女房もう酌がず 八九寸
末席の手酌へ女事務も来ず 宗太郎
聞こえない素振りて手酌聞いている 大八洲
マダムにも失意の日あり手酌する 涼髪
神妙に時を稼いでいる手酌 千翁
何時の日か養子手酌のくせがつき 軸

君は今日僕は明日と炊事する 句念坊
ちぐはぐの勤めで同じ部屋に住み 千翁
同棲を目茶苦茶にする地獄耳 市郎
勘当を覚悟同棲悪びれず 淀月
同棲に女の方が意地になり 雄々
兄さんと言うふれこみで同棲し 宗太郎
同棲してまずと故郷をあわてさせ 可住
同棲へ妻だけ老けたように言い 好女
同棲の先ず考える二階借り 季賛
同棲をゆるす両親長い文 照見
同棲の二人いつでも死ぬ気で居 卯之助
同棲は冷たい人の目を感じ 久雄
同棲の男大きな夢があり 愛鳩
同棲に一と役買った友を責め 晴嵐
敷金が出来たら同棲すると 十九平
悪友が同棲先をもう訪ね 同
奥さんと呼ばれ同棲照れており 尚史
同棲のアラを家裁でぶちまける みのる
同棲をしてお互いに夢があり 孝風

色紙短冊
書画用品
大坂戎道
丹精堂
宮中セニシ

錠前の置き場同棲きり極秘 八九寸
同棲にひやひやアバウト管理人 保夫
同棲の使い果たした頃御用 みのる
許されぬ同棲ながら無事と聞く 芳朗

佳

奥さんと呼ばれ同棲苦笑する ひか平
同棲の一步手前で毘を知り 旭峯
同棲へ姉出戻って波をたて 藤波
内縁と書くさびしさもいっか馴れ 生薑
同棲してる女という疲れよう 晃男
駈落ちをして同棲の部屋を借り 雪美
同棲して連子の育つ日をかせぎ 周甫
同棲をしてから知った過去の罪 利子
同棲はもつと貴方を識ってから 八郎
同棲がばれて帳簿の穴も 知れ 天悟空
虎と獅子迷惑そうに同棲し どんたく
新らしき石油厨爐同棲す 痴亭
同棲を何時も横目で管理人 博良
同棲へ別れなさいと相談欄 圭水
合鍵を持って同棲朝を出る 九呂平
同棲の夢へつれない 権利金 和三四郎
同棲の窓のカーテン引いたまま ひか平
同棲の過去は互いに秘めたまま 代仕男
同棲の男が捜査の線にうき 庸佑
同棲へむごい事聞く 調査員 圭水

人

同棲の条件家があると云う 九文銭
同棲を許す荷物を送って来 宗義

地

同棲が出来ぬ二人へ田地の灯 和三四郎

天

化粧

軸

同棲へ兎に角帰れとまでくだけ 芳朗
同棲に厳しい説は嫁き後れ

山川阿茶選

初化粧ビエロのように紅がつき 好女
お化粧も昔屋育ちのデラックス 代仕男
只散歩するのに妻は塗って出る 蛙水
化粧した母さん好きと云ってくれ 美由起
あの人が使っているから買うビネラ むじな
素人にしてはと思う厚化粧 光道
ガラス戸へ女日雇髪直す 和三四郎
内職が幾日分ぞ化粧代 秀峰
退庁時顔の化粧に念が入り 祥月
白粉の紅の年頃金がいり 雪美
女剣劇すめば女の化粧する 弘道
美容師が化粧の見本の顔でゆき 博友
お化粧に入念新妻艶を増し 八郎
湯タンポを提げて化粧のチニス来る 照児
化粧せぬ妻でいささかもの 足らず たけお
鏡台もこわれたままで子が育ち 弘村
フランスの匂いが降りる キャデラック 可住
長すぎる化粧とうとうかみつかれ 杏花
アルバイトお化粧だけをおぼえて来 宗義
知っていやはるらしい鼻の厚化粧 瑞歩
制服を脱いで化粧をしはじめる 孝風
今日だけを角かくしする厚化粧 千翁
念入りに化粧舞台ですぐ斬られ 涼髪
化粧して見たい微熱も去った午後 大八洲

つるし柿顔まけと云う化粧で来 野迷路
共稼ぎ朝を化粧に追われがち 季費
素顔かと思える化粧も堂に入り 石峰
ヘンクリで惜しみなく買う化粧品 博良
学窓を出立て白粉のらぬ顔 痴亭
成長の途上お化粧生き生きと 周甫
お顔だけ塗って心はそのまんま 雄声
お化粧のうまうまかない日は合わず 鶴汀
日めくりの今日はバツクをする日なり 初甫
事務になれ人になれ化粧厚くなり ひろし
倦意期薄化粧すらしなくてくれ 隆文
お白粉もおべへはめられ娘の得意 藤波
高女生もうジュジュエだけにあきらま みのる
バチンコの中に酔ってる厚化粧 八九寸
待たされるママの化粧へ子は眠り 利子
塗る前に腹ごしらえの楽屋裏 圭井堂
男みな阿呆に見えるアイシャドー 一鶴
主婦の座をしつかり守る薄化粧 雄峯
月給で足らぬコトイを愛用し 淀月
丹精にヘチマ育てて化粧水 句念坊
リバイバル巻絵の化粧箱が売れ 九文銭
お化粧をしても知性がついて来ず 雄々
化粧して男に媚びる訳でなし 卯之助

佳

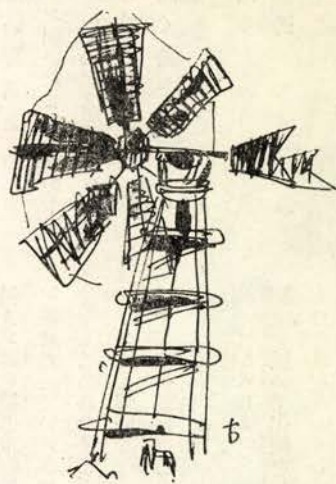
化粧する妾を間抜けた顔で待ち 九呂平
いい年をして化粧品屋の口に乗る 芳朗
バトロンが化粧のことも口を出し 十九平
初舞台の化粧へママはつきつきり 天悟空
個性美を無にするように化粧する 久雄
心得て手伝いさんは下手にぬり 一峯
化粧品鼻が麻痺するほどえらび 宗太郎

品質優良
先カペン
TACHIKAWA PEN
大坂市東区常盤町一丁目十一番地
立川ペン先株式会社



おぼろ月舞妓化粧も今日かぎり
化粧する間に夫の気が変わり 和郎
お化粧は他人任せの芽出たい日 勝子
芽出度い日娘の紅を一寸借り 静水
紅をとく旅の楽屋へ出前来る 光郎
お化粧は他人任せの芽出たい日 勝子
芽出度い日娘の紅を一寸借り 静水
紅をとく旅の楽屋へ出前来る 光郎
お化粧は他人任せの芽出たい日 勝子
芽出度い日娘の紅を一寸借り 静水
紅をとく旅の楽屋へ出前来る 光郎

望 | 展 | 界 | 柳



句 会

▼本社四月句会は七日(土)午後六時から千日前電停前自安寺で開催する。春宵の一刻を川柳のダイゴ味に、柳友多数御誘いの上出席願いたい。▼南区医師会文化部杏林川柳会(大阪市)句会は三月二十日(火)午後七時半から三休橋南詰中島小児科診療院楼上で開催。▼南海電鉄川柳句会(大阪市)は三月十五日(木)午後六時半から難波親和クラブで開催。▼コクヨ川柳会(大阪市)句会は二月二十三日(金)午後五時半から黒田国光堂で開催。▼大阪通信病院川柳句会は三月二十四日(土)午後二時から五階会議室で開催。▼大万川柳十一周年記念大会は三月二十五日(日)午後一時から大

阪市阿倍野区松崎町割京大万で開催。以上路郎主幹出席。▼川雑岡山支部三月例会は十日(土)岡鉄クラブで開催。▼川雑備前支部句会は二月二十五日横山一声居で開催。▼川雑備前支部三月例会は楢原竜泉、万女夫妻送別句会として十七日夜竜泉居で開催。▼ひろしま川柳会三月例会は三月十一日(日)午後一時から慈仙寺で開催。▼国鉄中国支社本所クラブ川柳大会は二月二十四日(土)午後一時から広島市内山陽荘で開催。▼熊本通信病院三階会議室は二月十七日(土)熊本通信病院三階会議室で開催。▼第十三回新潟県下川柳大会は昭和三十七年六月十日(日)

午前十時から新津市本町一新森亭で開催。兼題、各選者名指定の上雑詠二句以内(合計十句)、選者川上三太郎、白石維想楼、中島紫痴郎、三城信子、大野風柳の諸氏投句は各選者別紙に明記の上、百円封入六月一日迄に新潟県新津市駅前柳都川柳社内大会事務局宛。▼川柳宮城野(仙台市)本社句会は四月二十日(金)午後六時から東八番丁一七〇後藤閑人居で開催。▼ひろしま川柳四月句会は四月十五日(日)に野外で開催の予定。▼川柳噴煙(熊本市)四月例会は十日(火)午後六時から大江町交通局クラブで開催。▼長野県川柳大会は五月廿日(日)午前九時から長野市相之木東、阿ら井で開催。宿題(各三句)「ひしめく」水鏡選「受入れ」純二郎選「元氣」春蛙選「裏」有為郎選「どん底」月人選、特別課題「頭(あたま)」参加者互選、優秀作品決定一句吐(二句推選)席題当日発表(三題)宿題切四月三十日、会費二〇〇円、投句のみは五日、送句所長野市権堂町二二三六(深沢方)長野県川柳大会事務所。▼川柳きやり吟社(東京都)の四月句会は一、二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十、五十一、五十二、五十三、五十四、五十五、五十六、五十七、五十八、五十九、六十、六十一、六十二、六十三、六十四、六十五、六十六、六十七、六十八、六十九、七十、七十一、七十二、七十三、七十四、七十五、七十六、七十七、七十八、七十九、八十、八十一、八十二、八十三、八十四、八十五、八十六、八十七、八十八、八十九、九十、九十一、九十二、九十三、九十四、九十五、九十六、九十七、九十八、九十九、百。

消 息

千代田区神田東紺屋町、毫棋寺東京別院で開催。宿題各三句。(弱い)星文選(強い)光村選(孝行)岡魚選。▼路郎、霞乃主幹夫妻は三月十八日(日)毎日ホールで開催中の浪花踊を鑑賞されたが、路郎主幹は同日ヒル十二時三十分から今橋クラブで開催された俳詠「早春」四百句記念句会に出席の後、踊りをのぞかれたもの。▼霞乃女史は二月二十六日奈良県立医大附属医院に入院加療中の上田翠光氏を見舞われ、斗病生活中の同氏を激励、一日も早い快癒を祈られた。▼柴谷宰二郎氏(神戸市)は三月十四日不朽洞へ来訪、折悪しく路郎主幹は不在であったが、約二十年ぶりに霞乃女史と歓談。川柳雑誌刊号の表紙を画かれ、路郎主幹の句に添画されていた往時の感慨を語られた。▼橋本緑雨氏(大阪市)は二月二十三日に、国弘半休氏(下関市)は三月九日に来洞、それぞれ路郎主幹と歓談された。▼清水白柳氏(大阪府)は三月十六日に南紀白浜へ商用で出張され「飲みすぎて景色どころでない男」の句信を寄せられた。▼森田若人氏(鳥取市)は三月二日不朽洞を訪問、霞乃女史と歓談された。▼八木摩太郎氏(堺市)夫妻は三月二日天保山を出帆、道後・高知・琴平など四国周遊の旅を業しまれ、五日帰阪されたが、道後では富田狸通氏を訪問、柳談にひと時を過ぎられた。「アベックで来れば道後の湯はあつし」▼川岡壹眼子氏(諫早市)は諫早川柳文芸会を設立され、会長に推挙された。氏は大阪在住時代、元、川雑神津支部の有力メンバーだった。▼河相す、む氏(西宮市)は三月四日社用のため知多半島の南端、師崎に出張されたが、所用の前後を利用して三河国立公園に遊ばれ唐人お吉の生家、二万羽の海鶴のいる鶴の池などを探訪、知らぬ土地への楽しい旅の味を満喫された。「旅ひとりまだまだ広いと知る日本」▼山田季養氏(広島県)は本社三月句会に出席されての帰途、満員の列車で一睡も出来なかったとのことだが氏は今年になってからの本社句会に全出席をされている。遠隔地からの出席にはただ頭が下がる。「夜行車が僕へ流感おいて行き」▼田口麦彦氏(福岡市)は論文作成最後の仕上げに九大図書館

不朽の人々



合衆レイヨンKKの木村長三郎氏

真柏まかしの精こころいまにも猿臂さるうでのばししそう
(千 容)

実生の稚苗を小鉢に植えて育てる、趣味というほどではないにしても心菜しいものである。幹が太るにつれて、鉢を替えたり、枝を曲げたり、切ったりも亦興味深いものである。

私の盆栽は、皆かくして集まったもので、地方地方の山川を記念に、根びきしては、ポケットに入れて持ち帰り、そして三十年四十年と経った今日、みなそれぞれ思い出がある。忘れがたいその思い出とともに年中愛育をつづけている。

二月廿三日
（以下略）

館、研究室に閉じ籠っていられるが、この程母堂が喘息のため入院されたので急拠帰熊された。▼山田季費氏（広島県）は二月二十六日山口県光市の国鉄光自動車営業所へ出張、途中、旧海軍工廠を車窓から見るとその大きさに驚嘆された。「旧工廠今生産は平和なり」▼中村九呂平氏（下関市）は長男呂久平氏が三月下旬にスイートホームを持たれ、令嬢の結婚されるのも今年のうちかと思われるので住宅の問題がからんで来て、三月末日、嬉しい転宅の運びになりこのところ、てんやわんやの有様ですと。▼河本南生子氏（松山市外）は四月四日から慢足舘観光旅行で近畿地区へ出発される。一行

中には立花三笑、伊賀上安一氏の柳人二名が行を共にされると。▼麻生霞乃女史は二月二十四日が古稀に相当するので自祝乾盃された由。

▼林野睦光氏（呉市）の令閨は予ねて心臓病のため病臥されていたが、病状悪化二月二十二日死去された。謹悼。

▼河盛ヒサエさん（河盛堺市長夫人）が三月十四日に他界せられ、十六日午後二時から三時まで堺市の紅谷寺で告別式が修され数千の盛儀であった。享年七十四才。謹して悼む。本社から麻生路郎主幹、八木摩太郎氏等が焼香された。

▼菱田満秋氏（名古屋市中区栄場町二ノ一日比野方へ転居）

正 誤

▼前号二十二頁、上段二行目、福増久雄とあるは稻増の誤りに付訂正。▼前号四十三頁、二段二十九行目の句主正一とあるは生々庵の誤りに付訂正。▼前号四一頁二段目二行目及二七行目の句主八郎とあるは和郎の誤りにつき訂正。

—（薫風子）

★新会員紹介

三月

▼川岡雲眼子（諫早市）正 — 霞乃女史推薦

▼石井夏生さん（香川県）正 — 霞乃女史推薦

—（多久志）

★築山快夢起氏より（カノルル市） — 路郎宛

二月五日付空便拝見、先般若本多久志氏御米布の折に關し、御丁

寧な御言葉で恐縮して居ります。遠来の珍客ゆえ、もっと歓迎申上るべきでしたが団体行動の御旅程とて格別な事も出来ず、句会当夜にゆっくり御目にかかれた位にてまことに物足らぬ気がしました。

然し御本人はライオンズの集会にも出席され、ハワイの風光美も満喫御満足の様に何より心嬉しく感じました。定めし御土産話やスライド写真等にて当分布吐熱が湧き上ることでしょう。

—（以下略）

二月廿五日

★木村千容氏より（倉敷市） — 路郎宛

御手紙拝見いたしました。今年のは寒さが身にしみます。大炬燵に入って冬眠中です。幸に私の部屋の外窓は美術館の豪壯の石垣とその上へ突出している松林を借景に空には去来する雲や霧があり、石垣側を車車人々と動くものの前景が添って、朝昼晩と一幅の墨絵となり、時には又油絵のようでもあり、終日目を楽しませてくれ街中かということも忘れることもありません。「何くそとおもえど七十六ではね」氣ばかり元気で体も動きます。

—（以下略）

落語に出す川柳

不二田一三夫

が高座から流されても文句を云う筋合いはないようだ。

いつかも穴埋にちよつと書いたが、ある文芸誌へ投稿する読者に短歌・俳句等は歓迎するが町内で知らぬは亭主ばかりなりというふうな川柳はこまる。と警告したのである。

川柳を知らぬはお前ばかりなりと云ってやりたいが、現代のいい川柳をみんなに知らせていない川柳人にも一端の責任があるのであるのか。

「碁どろ」(柳家小さん)という題名は碁の好きなドロボツを詰めて「碁どろ」というのだが、川柳のように省略が利いて愉快なタイトルだとおもう。

この「碁どろ」のプロローグにへぼ将棋王より飛車をかあいがり
が出てくる。夏の緑台将棋のツン・カットである。

詰んでるに肺肝砕くへぼ将棋
——ちよつと待ってくれ……こんなとこ二三手待ってくれよ。
——というふうな場面である。

見物の下知に従がうへぼ将棋
——そう、その、あ、桂馬桂馬、いいやな桂馬。桂馬で王手といっ

てみるよ……そうじゃねえ、その香車のきいてるところから打つたよ。……あ、上がってきた上がってきた。そ、よし、その歩を突け歩を突け……角を遊ばしたって仕様がねえじゃねえか。

と、見物人が将棋をさしているのである。こういうところから本筋にはいつて、碁の好きなドロボツが大きなフコ敷包みを首から肩にしなげら、奥の部屋から聞えてくる盤石の音に、フラフラと本職を忘れ、この家の主人たちが碁をかこんでいるとこへノコノ顔を出して、

——あ、そりやつまらないよその石は。
と、やりだすハナシなのである。

「芝浜」(桂三木助)には芭蕉翁の句がでてくる。

曙や白魚しろきこと一寸それと、

初鯉とぶや江戸橋日本橋
——というのがあがるが、やはり落語は川柳にかざるようである。

「甲府い」(三笑亭可楽)このハナシに登場する主役は甲州から出て来た田舎者で、主人が豆ふの売り方を教えたりするが、最後に甲府へ行くとき、

續

川柳書架

(18)

句集

(川上三太郎著)

★本書は川上三太郎川柳作品集で自選百三十九句を自書(松尾少輔彫刻)したもの。

★昭和二十七年一月一日発行。B5版。和紙和綴、三百部限定本、非売品。発行所、東京都中野区川添町二七、蒼蒼亭。

★末尾の「風」について——の後半から抜く。

(前略)これは私が昭和六年頃から、二十二年頃までに書いた作品から、私の好きな句を集めたもので、在来の川柳の心身を持ったものもあれば、それからすれば略聖児かに見えるものもある。いずれにしてもその価値の有無は、おのずから私の死後に上下するであろう。但しそれとは拘りなく三太郎はこの句集によって、少くとも永遠に呼吸している事はたしかである。したがってこの句集を手にするわが友よ。この句集のあると

ころ、私は永遠に君の胸に生きています。私が幸福である如く、君が幸福であれと希いつつ、永遠に君の胸に生きています。云々。(以下略)

★著者は柳誌「川柳研究」を主宰川柳作家の第一人者。

大陸風物吟

龍沙句集

(石原沙人著)
青竜 刀著

★本書は著者の俳句・川柳集である。

★目次をのぞくと、
俳句——沙人集(細目省略)
川柳——青竜刀集
旧正風景・廟会・ラマ廟・端午

・中秋月餅・露天市場・茶館・花街・阿媽・苦力・掌櫃・太

・要飯的・戲院雜觀・蛇皮線・胡弓・飯館・廟市・自行車・紅

事・白事・街頭さまざま・味覚道楽・北京名所・人日記・信教

各態・動物・社会百面相

★昭和二十七年九月一日発行、B6版一二七頁。頒価二〇〇円。発行所、東京都世田谷区太子堂町四三二山河発行所。

★著者は元満鉄に勤務していた名物男、石原巖徹氏、現在は東京都に住し、「諷詩人」を主宰。

——どちらイ?

——(節をつけて) 甲府ウ:い。

——というようなサゲがあるので「甲府い」という題がついているのである。

——エエ、合縁奇縁でえことをよく申します。人間はどこに縁があるかわからない。
はまぐりばたて
蛤は帆立と鍋でめぐりあ

い
という川柳がありまして、蛤も帆立目もおなじ海で、まあ遊んでたか苦労してエタかそいつアわか

りませんが、この帆立が取られまして鍋にされます。おなじとこにいた蛤がこの鍋で煮られるてえのも何かの縁のようでございますなア。
とシャバリだすのである。

「笠碁」(三遊亭小田朝)に、
碁がたきは憎さも憎し懐かしし

というのがあるが、これは「待つてくれよ」「イヤ待たぬ」で喧嘩した二人だが、やっぱり両方とも会いたくなって、雨の中を何回となく往ったり来たりする。傘を妻の買物にとられたので笠をかぶって出て結局はそのまま碁をするところから「笠碁」の名がある。

「佃祭」(三遊亭金馬)むかし両

国の橋詰めに、放し亀というものを売っていた。客が値をきいてから十六文のをやめて八文の亀を買って橋の上から放してやった。八文の亀はよろこんだが、十六文の亀は放してもらえなかったので、善人があるので亀がむごく

され
と売れのこった十六文の亀の気持ちに同情したものである。

「鼠穴」(三遊亭円生)活躍するのはほとんど兄弟二人だけというハナシだが、いきなり、

——エエ、古い川柳に、
江戸ッ子の生まれぞこない金をため

というのがございますが……



とハナシ出すのである。貯めこむためには女房も貰わないというガメツイ兄の、弟に対する兄弟愛とケチの相克がこの一篇にははえましく流れているハナシである。

「道灌」(三遊亭金馬)こ存じ太

田道灌が出たり、四天王の話にはいると、徳川や頼光から道楽の四天王では競輪、競馬、酒、麻雀までとび出してくるハナシだが、七重八重花は咲けども山吹の寒の一つだになきぞかなしき兼明親王の古歌が出るかとおもえば、

新造にふられ年増に意見され
という川柳も出てくる。

「五人廻し」(古今亭志ん生)これは扉ばなしである。むかしの赤線女性が、四人の客と愛人の五人に廻しをとるハナシだが、ここへ出てくる川柳はおなじみの、

女郎買いに振られて帰る果報者
のほか、
傾城にかわいがられて運のつき

がある。

まだこのほかにいろいろあるが、そろそろスペースも予定終了に近いので、手落ちはあるてもオチのないハナシだからこのへんでペンをとめることにする。
この稿にある古川柳が、はたして正しいものかどうかは、富士野鞍馬先生や山路開古先生にご教示

ねがわないとわからない。
(普通社発行・書留名作全集)

川柳まつり

川雑

熱

情

選 郎 路 生 麻

(2句)
(便着本社日本末月六日切) (明記号雅部名支面箋)

日時 7月8日(日) 午後一時

会場 四天王寺本坊(電話七七〇〇六六番) 天王寺区元町一七

司会 松江梅里
開会の辞 若本多久志
柳話 中島生々庵
柳話 麻生路郎

講演 小野十三郎
「空想力について」
兼題 「喜び」(3句)
「声」(3句)
「庭」(3句)
「素足」(3句)

中島生々庵選
北川春葉選
清水白柳選
西尾 栞選

出席者も兼題全部・各題句箋別紙・裏面に
雅号明記六月末日本社着便のこと

席題 当日 三題発表(各題三句)

★特別課題「情熱」発表 麻生路郎選

呈賞 ★各題天地人・各題天位から路郎選による不朽洞賞

★特別課題発表者に路郎賞 ★優勝者所屬の会に大優勝権を贈る。(優勝権は明年川柳まつり当日返還。川雑支部、筆支部に別した作家が優勝した場合は川雑本社の獲得となる)

余興 (選って発表) 有志 諸家

閉会の辞 土井文蝶

会費 百五十円(参加者全部におみやげ進呈)
懇親宴 会費五百円(同会場において5時半から7時までの予定)

★投句だけの方は郵券五十円同封(6月末日)

金 泥 集

課 題「義 理」

麻 生 葭 乃 選

みぞれまじりを断けつけてくれた義理 さま子
 義理固さが過ぎてだんだんけむがられ 同
 子供にもあったキャメル二個の義理 同
 義理買いの切符で義理の穴うずめ 阿茶
 義理欠いて自分の 哲学押通し 同
 展示会やっぱり義理で買わされる 同
 よく出来た母子義理とは見えぬ仲 勝子
 義理で云うお世辞とわかり腹が立ち 同
 借銭も払わぬ不義理酒は飲み 同
 羊羹のちと堅いので義理がすみ 徳子
 スト・ストで義理人情の世がすたり 同
 蜜柑籠さげてはるばる義理の母 同
 義理買いをせんといてやとすめられ 操子
 義理を売る人を不義理で追返し 同
 言い訳は義理で飲んだとすむ息 春栄
 義理のある町素通日も出来ず 同
 義理のある紹介状をもてあまし 清子
 義理義理と云うて世間を狭う住み 同
 宿命が義理の子供を育てさせ 栄
 義理と知る無口へ母は気をつかい 同
 義理人情云うてはおれず判捺さず 酔夢
 まごころが通ぜず義理の母ひがみ 同
 地主への義理思うまい思うまい 美喜
 義理固いお人とされて味気なし 美代
 義理の子と云われたくない気の疲れ 都詩子
 義理で行く率列みかんの皮が落ち 周甫
 告別式隣りへ名刺たのんどき 友子

次回題「自炊」切四月末日

★ ★ ★

昭和36年度(第11回)

大万川柳ベスト10決定

★ ★ ★

春は大方の川柳大会からと云う。そして、きまって大阪の春場所中で茶の間の棧敷から観戦するのである。ことしはちょうど千秋楽の日が大万川柳大会の日でテレビは鵬柏、会場は梅水(梅里氏と水客氏)両横綱。

松江梅里氏が四年連続ベスト・ワンを達成された。正本水客氏が川柳のひきだしを看板に、梅里氏の独走の前へ大手をひろげたが、ついに同点で前年の成績順により第二位になったことは惜しい。

石川県の関戸宗太郎氏が最終回で堂々七点を獲得して第三位に躍り出たことは日頃の精進のたまものであろう。

桶高薫風子氏が後半筆を休めたことが、15点組や、15点半組の五氏にファイトの火をそそいだようであった。第7位の春巢氏から第12位の清人氏までわずか1点というせり合いは近來にない激戦だった。

三賞は、殊勲・正本水客氏、敢闘・本多柳志氏、技能・本多清人

- | | | | | |
|------------------------|----|-------|------|-------|
| 氏ときまった。この一年間の苦吟の跡を見ると、 | 1 | 松江 梅里 | 27・5 | (大阪) |
| ベスト・10 | 2 | 正本 水客 | 27・5 | (大阪) |
| | 3 | 関戸宗太郎 | 22・0 | (石川) |
| | 4 | 本多 柳志 | 18・5 | (大阪) |
| | 5 | 本田恵二朗 | 18・0 | (児島) |
| | 6 | 山川 阿茶 | 17・5 | (大阪) |
| | 7 | 北川 春巢 | 16・5 | (大阪) |
| | 8 | 金泉 万染 | 16・0 | (大阪) |
| | 9 | 金井 文秋 | 16・0 | (大阪) |
| | 10 | 小浜 牧人 | 15・5 | (西宮) |
| ベスト・20 | 11 | 内藤ささ子 | 15・5 | (岸和田) |
| | 12 | 本多 清人 | 15・5 | (大阪) |
| | 13 | 不二田三夫 | 14・5 | (大阪) |
| | 14 | 早川 清生 | 12・5 | (三島) |
| | 15 | 田村 藤波 | 12・0 | (岡山) |
| | 16 | 服部十九平 | 12・0 | (岡山) |
| | 17 | 池上知恵美 | 11・5 | (岡山) |
| | 18 | 吉田圭井堂 | 11・0 | (堺) |
| | 19 | 今西 生薑 | 11・0 | (大阪) |
| | 20 | 桶高薫風子 | 10・5 | (大阪) |

か一つ忘れものをしてしているような気がするのだ。それは須崎豆萩という四文字が消えていることである。『こういう題なら豆萩さんが生きてはいたらおもしろい句が出るぜ』

発表の巻き紙を見るたびに誰かがもらす言葉だった。須崎豆萩という雅号は川柳水遠のもののようにある。自分のことでおそれいるが、昨年の大会で堂々第2位の豆萩さんがどうしても起てず、梅里氏が自動車で迎えにまで行かれたのに欠席されたため、ほくが代選させていただいた。豆萩さん最後の選をほくがやらせてもらったことは生涯の思い出になるとおもふ。順位からいくと内藤ささ子さんになるのだが、豆萩さんが前日まで、這ってでも出席するといっておられたので当日まで待っていたのである。偶然とはいえ阿倍野支部の後輩であるほくにこの大役がまわったことは、今になってありがたいことだとおもっている。

昭和37年度は「未練」から火ぶたが切られた。

「未練」がさきに出てきたが、とにかく梅いのこのらぬようガン張りしたいものである。

大会記事は次号で発表することになるが、梅里氏の五連バに挑むものはあなただ。(一三夫)



投稿規定
▼用紙は原稿用紙▼文字は正
確▼締切毎月十五日▼投稿先
本社宛

本社 三月旬会 (大阪市)

3月7日 午後6時

会場 — 千日前自安寺

三月の声をきけば、さすがの流感もカ
ゼと共に去ったようである。

プロ野球のオープン戦が各地から茶の
間のスタンドへ流れてくると、もう春が
そこまで来ているのだ。

若本多久志氏の帰日歓迎句会というの
に、雨で出足をすくわれたか、二月より
出席が落ちたことは残念だった。しかし
近來にない和気あいあい、朗笑また朗笑
の渦である。きょう初出席の加賀屋中学
校の先生方も、この明かいムードには
きつと満足されたこととおもう。

路郎主幹が連日の仕事の疲れで欠席さ
れたが、活気あふれる諸選者の披露に会
場が盛り上がったことは、川雜家族
の名に恥じぬ和やかさがあつた。

山川阿茶さんから亡母の祥月命日の
供養に「津の清々のおこしをいただい
た。お礼申し上げる。

多久志氏の柳話とハワイみやげである
スライドと8ミリ映画が、仮設自安寺劇

場で封切された。そのカラーフィルムの
美に時間の経つのも忘れ終演時間もすぎ
たので四月旬会へロング・ランすること
になった。今月の不朽洞賞杯は、熱の人
吉田圭井堂氏がにぎられた。(F)

出席者— 葦乃・薰風子・清風・水京・
圭井堂・柳宏子・静馬・白柳・白童・恭
太・五里・狂二・繁雄・すゝむ・紫香・
舟遊・いわを・栞・和郎・イ女・多久志
・一瓢・梅里・柳志・いさむ・水客・あ
きら・庸佑・生々庵・好郎・清人・六竜
子・南宗・文秋・愛論・阿茶・一三夫・
雄声・小松園・季費・宏子

兼題「内 氣」 中島生々庵選

日曜の日直内気へまたまわり 一三夫
托鉢の内気な方は後につき 白柳
綿々と日記に書いて諦らめる 圭井堂
三本目ころから内気しりり出し 静馬
夫唱婦随内気同士で気が揃い 小松園
これしきの事へお酒のいる内気 あきら
涙ぐむだけが内気のレジスタンス 一三夫
内気ではあるが嘘も交つとり いわを
内気やと親だけ思いこんで居り 柳宏子
内気のくせに女に大胆な 好郎
ヒスの時以外内気な女房ぶり 多久志
五六ベン通つて戻つて来た内気 紫香
内気だと信じこませる手をつかい 庸佑
喋るだけ喋つてワテ内気だす 繁雄
女房にまたけしけられて来た内気 紫香
気のかかんたちで女難をふりまされず 梅里
青春の内気へ妻の気が疲れ 六竜子
本当の恋を内気の遺書で知り 圭水

兼題「紐」 西尾 栞選

手土産に内気なことを言いそえる 水客
内気な養子家も屋敷も飲んじまい 雄声
一芸の順を乱した内気もの 八九寸
正直で内気で馬鹿を見つツ逝き 芳朗
目立たずに内気いちばん金をため 静馬
よせ書の隅で小さくいる内気 柳志
くだまいてるのが内気な方だった 雄声
言いまけて俺の内気がいじらしい 生々庵

兼題「リーダー」 西いわを選

リーダーは小さい事にも気をくばり
リーダーに合わず三三七拍子 庸佑
リーダーになつてわが子の大人びる すゝむ
リーダーが欠けて予定を少しかえ 紫香
リーダーの叫び山彦となる 吹雪 梅里
リーダーにつづいて人道からはずれ 舟遊
アリのパイの事までリーダー引き受ける 生々庵
リーダーの熱意に妻も子も忘れ 圭水
勝つても負けてもリーダー批判され 雄声
リーダーは山のこゝろも知つた人 あきら
リーダーが張り切る程にいてこそ 紫香
潮どきとみなかリーダー折れて出る 圭井堂
リーダーともおつちよちよとも言われ 栞
リーダーを信じて山の霧を分け 一瓢
ハチ巻きのリーダー一段高いとこ 愛論
リーダーにリーダーの要る頼りなさ 梅里
リーダーの知らない道へ出てしまひ 静馬
リーダーは勝つても負けても声が枯れ 清人
ひげのあるのがリーダーだとわかり 多久志
デモ行進もうリーダーのまんならず 狂二
リーダーの鉢巻きみんななまきすつて 紫香
リーダーを替えてフアイトが燃えあがり 文秋
リーダーが派手なリクツを背おわされ 宗太郎
リーダーの指がきれいなシフオニー 一三夫
リーダーとして今日は社長に帽をつき 多久志
二次会に来てリーダーの座になおひ 生々庵
リーダーの勘クレーンは軽いもの いわを

兼題「手 頃」 菊沢小松園選

故郷へ手頃の土産で途中下車 繁太郎
手頃なところで手を打つ如才なさ 一鶴
お手頃とふところ見透すよすめ 生 蓋
敷金のトコで手頃にけつますき 芳朗

手頃ですねと周旋屋独りきめ 照見
 手頃やが値札を返してそつとく 句念坊
 仲人の手頃な嘘で結ばれる 青風
 手頃の石がなくて吹えられ損で行き 一瓢
 手頃だと買った月賦が重荷なり 圭水
 手頃でもいざ売るときはたかたか 圭水
 旅先きは手頃な飲み屋見つからず 恭太
 児の喧嘩手頃な石が見つからず 静馬
 庶務十年手頃の椅子と思つてず 好郎
 手頃だと思つたとんに人が買い 南宗
 お手頃のダイヤだつて押しつける 静馬
 手頃とはやっぱり値段のことにして 榊
 手頃なのがあればと再婚はめめかし 梅里
 なるようになって手頃な妻もいら 白童
 手頃だと安物ばかり買うてくる 柳宏子
 手頃な遊び相手と蔭で言う 水客
 嵩あつて値頃の祝いまださがし 好郎
 いいものは手が出ず手頃は氣に入らず 梅里
 特売場手頃なものは先きに売れ 梅里
 手頃な嫁もらつて無事な父になり 舟遊
 品物は手頃なところから見せはじめ 紫香
 顔ぶれをみてから手頃なところで飲み 紫香
 手頃の値こも違うかくらしむき 庸佑
 境遇が手頃な恋で我慢する 小松園

席題「先祖」 森下愛論選

自慢するものは祖先の系図だけ 柳宏子
 新築へ祖先の机間に合わず いわを
 儲かってからご先祖を思い出し 和郎
 先祖代々金には縁のないさため 小松園
 ご先祖の遺言ですとつかぬ判 圭井堂
 お先祖は何であろうと好きは好き 女
 立志伝先祖の事は口にせず 狂二

貧乏に過ぎた先祖の墓を持ち 白柳
 ご先祖の苦勞へ光る床柱 六童子
 ご先祖に申訳ない株を買い 恭太
 ご先祖もガンを写真をうつさる あきら
 ご先祖の土地へ見上げるを建て 静馬
 ご先祖へ済まぬ不承な子が育ち 六童子
 ご先祖はどうかのこのとガード下 雄声
 押み屋はまたご先祖のことにふれ 一三夫
 夜逃げした人が立派な供養をし 清風
 有難や先祖の田畑でめしが食え 雄声
 代々の名も土臭きわが先祖 薰風子
 先祖代々と言う看板にしがみつ 柳宏子
 手を突いて先祖に見せる綿帽子 柳志
 先祖から我が家代々恐妻家 愛論

席題「湯氣」 本多柳志選

おでん屋の湯気へ梯子が吸い込まれ 文秋
 掌にも湯気少し立てて蒸しタオル 一瓢
 食堂の湯気を通して法善寺 小松園
 ハネムーンうれしい湯気につつまれる 阿茶
 仏飯の湯気消えぬ間に供えけり 生々庵
 おでん屋の湯気に乗通するつらさ 愛論
 立ち食いのそばがあわてる発車ベル 清風
 蒸したオルききれいな酌に取りまかれ 梅里
 湯気の立つご飯でないと気がいらず 雄声
 湯気三すじ立ててネオンの灯がともり 梅里
 鉄瓶の湯気は主人を待ちあぐね 紫香
 温泉の湯気の向うは女らし 一三夫
 ハネムーン湯気へ幸せ満ちあふれ 六童子
 吸入器美髯に湯気の露が浮き 狂二
 話好き茶碗の湯気も立ちつくし 恭太
 窓口で怒るオッサン湯気を立て すゝむ
 かけ声へ湯気の中から返事が来 紫香

湯上りは後光のように湯気上り 庸佑
 風呂の戸を開けて眼鏡思いつき 六童子
 湯気こもる一番風呂へ旅の朝 柳宏子
 赤ん坊湯気のまんまを抱き上げる 榊
 道端に湯気がたつてる温泉地 紫香
 湯気越しに見てあの顔を買いかがり 狂二
 倦怠期湯気もたない膳が待ち 柳宏子
 ボイラーの湯気雪空へ吸いこまれ 水客
 残業へうどんの湯気が鼻をつき 南宗
 かす汁の湯気にもなっている落ち目 水客
 豆腐屋のおからの湯気に朝が明け 一三夫
 箱火鉢すねたお燵に湯気がたち 阿茶
 もらい風呂湯気もどこかに遠慮あり 白柳
 下水から風呂屋に近い湯気が立ち 圭井堂
 グレンヂの恋は肩から湯気が立ち 柳志

席題「貸間」 橋高薰風子選

間貸しして兼業の心配なくなつた 清風
 間貸しただけで刑事に呼び出され 清人
 学生の貸間ときどき女連れ いさむ
 物置きに畳を敷いて貸間にし 紫香
 貸間とは思えぬ程の権利金 白童
 貸間札つつましく住む老夫婦 舟遊
 学生さんと断つてある貸間札 柳宏子
 小説にあるよな貸間見つからず 静馬
 間貸しなどしてと未亡人らしく言ひ 紫香
 間貸しでもしょうかと酒量の落ちた父 雄声
 シャーベットカラーに貸間変えてみた 水客
 内職と貸間ぐらゐが女の知恵か 多久志
 閑静な貸間窓から墓地が見え 榊
 貸間人嫁かせた娘と同じ年 清人
 ねるだけでよいと貸間をたのまれる あきら
 縁談をいえば貸間もたのまれる 榊

37年度金出席者(三月現在)

和男・圭井堂・一三夫・文秋・清風
 白柳・いさむ・すゝむ・紫香・南宗
 柳宏子・薰風子・庸佑・静馬・生々
 庵・舟遊・梅里・女・阿茶・雄声
 いわを・愛論・季費・宏子・霞乃

天位受賞者

③文秋②三司・圭水・好郎・生々庵
 ①静馬・恒明・一瓢・客遊子・一三
 夫・雄声・庸佑・柳志・水客

不朽洞賞杯受賞者

圭水・一瓢・圭井堂

間貸ししてスヌマも開けず名前呼ぶ 白柳
 間貸しして以来家中もめつづけ 庸佑
 幸せな言葉で貸間ゆづられる 水客
 セミ河畔の貸間で今日の画家となり 薰風子

(庸佑清記)

川雑 阿枯野支部句会(大阪市)

金井文秋報

応接間名刺の順に客を入れ 圭井堂
 そんならと名刺へ一寸書いてくれ 堰子
 エキソチックに港がにおう春の宵 生盞
 法善寺抜ける気持ちも春の宵 白柳
 散髪をして何処へ行く春の宵 小松園
 寄り道をして久々の墓まいり 双葉

デートとは云わず奇り道告げて出る 柳宏子
 寄り道の酒屋で申辞考える 良
 まっすぐに帰れぬ人と妻 悟り 文 秋
 甘党の社長と聞いて小そう見え 専 翁
 顔だけを出して甘党膏を 抜 け 南 宗
 甘党として饗応の手をの が れ 好 郎
 吊り皮にすがつトラント 持 て あ ま し 清 風
 高飛びの荷をまとめた 手 が ま わ り 梅 里
 荷物まとめ妻の覚悟が 洩 り け 舟 遊
 赤字でも機密費だけは 如 才 なく 光 福
 アイデアへ赤字覚悟の 研 究 費 清 人
 赤字縁やっぱり 駅 長 さ ん も いる 凡 九 郎
 所得倍増即赤字 倍 増 恒 明
 寝た方がよかつた 稼 い で 赤 字 な り 葉 光
 赤字対策百田亭主に 逆 も ど り 恒 明
 赤字などどこ吹く風と 原 稿 紙 一 三 夫

川雑 淀川支部句会 (大阪市)
 分校でひとり三役ほど 教 え 孝 夫
 謝恩会先生のロマンス さ か な し 三 十 郎
 ゆきすりの喪服喪服に 会 積 し て 生 薑
 焼香する喪服に 添 う 遺 児 二 人 東 洋 男
 喪服へ虫が付くほど 患 ま れ て 一 鶴
 嬉しがり見本の葉も 貼 っ て 見 せ 句 念 坊
 うちの人阿呆かと思 っ う 嬉 し が り 水 洞

川雑 にしなり支部句会 (大阪市)
 後藤梅志選
 幼稚園から定年退職迄 刻 切 っ た 人 生 活 石
 時差出勤人のなだれの 外 を 行 く 慎 太 郎
 高笑い爆笑しつ つ な だ れ が お り て くる 凡 九 郎
 雪崩ですがなんと女中 気 に も せ ず 漣

ビツケルが漬品となつた大雪崩 牧 人
 大木も岩も雪崩に 無 抵 抗 末 一
 雪崩また遠くに春が 戸 を 叩 く 舟 遊
 陽は曇と雪崩は人を 呑 み し ま ま す 々 々
 被害出す雪崩へ部 落 強 く 生 き 竜 昭
 不意に来た雪崩へ 運 の い い 二 人 梅 志

川雑 玉造支部句会 (大阪市)
 西出一栄報
 コネありと見られ 新 顔 は っ と 考 え 正 一
 新顔もはいりり ー ー ー ー ー ー 文 秋
 新顔の手品のように 賞 さ ら い 句 念 坊
 新顔が人氣さつた かく し 芸 水 京
 新顔の女給へ客の 目 が 光 る 喜 久 堂
 ウサン臭そうに 新 顔 み つ め ら れ 柳 宏 子
 スキー場ファンション ン ヨ ヨ を 見 て る よ う 京 四 郎
 自然 敵 然 頂 上 の 雪 の 白 凡 九 郎
 雪溪の鶴へ空岳 蹴 っ と ば す 風 仙 洞
 電話機へ女の余韻 未 だ 残 る 六 竜 子
 余韻に酔うてアンコ ー ル を 忘 れ 清 子
 さよならの余韻 テ ー プ が こ と ず かり 一 栄
 興奮の余韻 たばこを 喫 い つ づ け 珠 笑
 ステレオの余韻で 快 よ く 眠 り 章 子
 仏壇の鐘の余韻に 黙 す 膝 白 柳
 風呂場ではえらいも っ く そ も な い 裸 河 太 郎
 ふんだんに色気も っ かい 夜 を 稼 ぎ は る え

川雑 ハワイ支部句会 (ハワイ)
 築山快夢起報
 世の波にもまれ 彼 岸 は ま だ 遙 か 紅 溪
 世渡りのコツ呑んで 波 に 乗 り エ ス 子
 世渡りの苦勞は 母 の 手 に 残 り 美 津 子
 還暦が来て世渡りの コツ 覚 え 紅 茶

世渡りの嘘も方便 割 切 る 気 浅 太
 鼻唄の世渡り 養 老 院 で 逝 き 拜 山
 世渡りの下手な女房で 氣 が 疲 れ 内 海
 自慢する癖が 渡 世 の 邪 魔 を する 柳 葉
 世渡りの上手は 嘘 も 少 し ま せ 万 里 歩
 世渡りに 馬 鹿 正 直 で 苦 勞 する 静 杉
 臍線を負して 世 渡 り 疲 れ る 萩 路
 バタ屋まで落ちて 渡 世 の 夢 も 消 え 快 夢 起
 世渡りが下手で 庶 務 課 の 隅 で 老 い 魔 花 麗
 世渡り十訓三代まで だ ば り 来 晚 舟
 神仏も世渡りの 臭 にお わ し ま す 平 八 郎
 人生の浮沈 渡 世 の 上 手 下 手 あ き 坊
 世渡りの設計神と 共 に 生 き 笑 有
 世渡りは上手と 憎 々 し げ に 云 い 須 磨 子
 世渡りは裸一つを 資 本 と し カ ロ 女
 世渡りも 終 点 近 く で せ い を 出 し 細 香

野村味平選
 お愛想をせない 候 補 に 氣 が こ ぎ 大 溪
 どのが 建 つ 候 補 地 価 が 釣 り 上 り 光 郎
 立候補して み な さん と お だ て ら れ 一 路
 選挙日までの 頭 だ 下 げ て お け 醉 羊
 成人の式に 着 せ たい 母 心 美 代
 一票がふえて ます ま す 当 に さ れ 久 雄
 成人をするまで 母 は 賃 仕 事 味 平
 成人の名簿を 借 り て 物 色 し 魯 木

川雑 大聖寺支部句会 (加賀市)
 きりのない月賦で 暮 し 世 を 終 り 泉 水
 世渡り上手 結 局 内 助 の 功 に さ れ 美 潮
 世渡りで 生 き め く 笑 顔 使 い 分 け 銀 水
 世渡りの上手は 疼 く も の も 持 ち 斧 平

食品と科学

食品と原材料・機械・包装の総合誌

4月号発売中 150円(〒18円)

特集

菓子飛躍している現状と将来
チョコレート・クラッカー
 カスターラ・クニハースの現状と技術上の問題点

砂糖の消費実態
 香料の利用実況

講座 | 食品工場の衛生管理 ①⑤
 食品品質管理

座談会 何でも喰ってやろう

◇海外ニュース ◇特許ニュース
 ◇意匠ニュース ◇商標ニュース

【展望台】主食・罐詰・菓子・飲料・添加物

食品と科学社 大阪6702番

大阪北區5丁目6番
 電話(361)9373~4

川雑 京都支部句会 (京都市)

田中鳥雀報

睡こくり飲んで凝視をまだ続け 生薑
窓からの光を神父凝視する 紫蘭
凝視する壁へ記憶が蘇がえり 和二郎
笑つて泣いてる寝言子の育ち 啞雀
内職の母に慰めともなる寝言 鳥雀
美德表彰地元のボスが顔を出す 尚平
他人様の幸を守つてやる疲れ 真砂
金粉をはけば遠山薄がすみ喜山
本物の金粉だから息をのみ紅寿
振向いた禅僧それから振向かず 藻介

川雑 米子支部句会 (米子市)

小西雄々報

金力を実力と呼ぶ世を嘆き 一保
野良話しびれ切らし子だけ去に 青香
日当のうちで飽をとぐ大工 一机
悲しんで寝るとき妻の手が温くし 蛙眠子
世をすねた人かと思える前衛派 素瓢
修業に出したに入墨して帰り 無閑
貧乏の暮らしの膳へ四季の香を 鶴丸
地元より山にくわしいスキー客 詩郎
税務署で待てば株の電話して 天邪鬼
潮騒が愛の言葉を送切れさせ 奎
リバイバル僕も一旗もう一度 秀峰
赤玉で結構女のにぎわって 千代
唇の薄さが喋る井戸の端 徂宣
ちぐはぐな下駄が残つて会が退け さだ
だしぬけにアベツ照らすパトロール 幸子
アパートに住んで恋しい土香り 節枝
あり余るシャハハ浮気の虫さわぎ 雄々

川雑 篠山支部句会 (兵庫県)

酒井ひか平報

結婚の話になれば娘はふくれ 凡志
結婚へふみ切る前のレジスタン 越山
うなずけば出来る結婚棒にふり 枝葉
遊ぶことぎょうさんあつてまだ嫁かず 可住
杯をチョッピリなめたでう夫婦 みのる
入れ仲人だれに頼もと気を使い 寿栄
貸衣裳同士で愛の手が震るえ 永断
結婚へ親は苦勞の金を借り 無鬼
男性を山本富士子嘆かせる ひか平
恋の熱さめたるし落語きいている 青峰
通り魔のようなブームに熱を上げ 永断
少々の熱でも五合位い飲み 青峰
合併の熱は会議が済んで消え 枝葉
窓明けて彼氏の熱をはぐらかし ひか平
振る舞いの酒で勝手な熱を上げ 水断
原稿のない熱弁がジンと来る 可住

川雑 土佐支部句会 (高知市)

川竹松風報

母さんの化粧はクリームだけですみ ける江
お化粧もせぬ妻となり共に老い 誠水
お見舞の来る日ベッドで薄化粧 一枝
冗談も言えぬ顔して二号持ち 弘子
冗談にいうたか所得倍増論 一実
冗談がカンにさわた戸の閉めよう 耕生
冗談へ枝すかさず喰い下り 康之介
冗談を本気で怒るハイティーン 勝子
冗談も言わぬ女房の紺の足袋 醉雀
冗談が本当になった高砂や 勝喜
明日からは冗談も云えぬ人となり 勤

寒がりか背中丸めた雪の朝 一甫
寒がりも暑がりもいる子沢山 利子
股火する寒がりの子を叱り 古城
紅葉に埋もれて死にたいと云う女 寛
今更に口説けば女笑うだけ 健一
据え膳へ女の機嫌取る理性 光明
成人式せめてと慈母の夜が更ける 翠川
パトロンが変り人生観も変り 松風
酒断てば備えくれそな社が二三 八重子
例年の型通りなり無事な新春 大介
甲斐性が婦唱夫随にしてしまい 貞子
頭から酔うてたろうと事故見舞 正祐
ひそひその話へ炭をつぎにくる 俊江

川雑 大鉄支部みなと句会 (神戸市)

植村客遊子報

肩書の名残りが髭にある守衛 白溪子
出たり入つたり晴着の鈴が鳴り 初甫
いつからか不精の父の顔となる 白李
停電へ検校の琴沓えかえる 杜的
門前の守衛の顔に身がすくみ 賀人
挨拶は妻にまかせてよばれてき 宗悟
懐手男不精な型に出来 万的
誰が着る晴着かよなへの灯をおろし 美由紀
救急車が来て事故現場の近き知り 千甫
停電の湯ふね男の口三味線 水客
晴着縫う針の運びの母たしか 客遊子

川雑 備前支部句会 (岡山県)

横山一声報

別れても恩師恩師といたわれ 竜泉
告別式はしやぐ遺児が又泣かせ 胡風
しばらくの別れへ涙ぐんで見せ 久米雄

久し振りに逢うて別れの際つかず 良子
觀光バス螢の光で別れをし 称子
金で張る意地へはついてよう行かず 一声
意地になつて生んだ子やっはり女の子 万女
意地たてて見てもやっはり女の子 あやめ
母ちゃんの意地で御飯が少しけ 正州
緻量良し意地が良過ぎて物足らず 三六
意地張つて師走の街をかけ廻り 芳月
無理矢理にたもとへ入れて来た寸志 賤女
無理矢理に出馬させた様に言い 東岸
無理矢理の突貫工事へ水が洩れ 道雄
無理矢理に歳暮の品をおいて行き 照路
無理矢理に酌げば盃冷えたまま 幸仙
無理矢理に入れた袋の底が抜け 伊久野
二次会で土産の折をあげちまい 宗義
二次会へ行つた証のマッパ出し 博
二次会や三次会なり除夜の鐘 秋月

川雑 弓削支部句会 (岡山県)

直原七面山彦

好きなことさしたつてとヒモの弁 生薑
抵抗をしない女で 興がさめ 仙人坊
一服で直ぐ効きそうなコマーシャル 杏朗
鼻につく女になつてまた 孕み 知恵美
県知事のサンタがやって来る施設 遠山
ありがたい好意に恋の血がたまり たつよ
会計のミスをソロバン弾き出し 三四郎
子の願いをもう無視出来ぬウリヌヌ 賢也
連れ節に音痴の声がはみ出され 周甫
病衣着て聖しこの夜を思索する 芳仁
餅つきのかげ声師走の風に舞い 甚六
ふる里のカピまで添えて届く餅 文舟
負けぬ気のペバのソロバンまた違ひ しおり

口程に指の動かぬ見取り算 栄
四十才のしわをはっきり鏡に見 七面山

大阪通信病院川柳会(大阪市)

橋本幸男報

新婚は牛乳一本わけて飲み 竹 莊
また火する守衛乳瓶を灰にさし 風仙洞
味噌汁でパンを食うてる牛乳屋 まさる
派手好きが教授の妻でおさまらず 春 雄
派手好きにデートをさされてくさし 史 葉
一張羅着ても外輪で娘は 歩 き ハナ子
一張羅また髪結に出掛ける 氣 愛 論
後にもさきにも只これだけの一張羅 没食子
一張羅のカバンだいいじにだいて寝る 竹 志
起すのもハナ声忘れぬ新世帯 よしを
この辺で鼻声になる手を 覺 え 草 右
堂々と車内で甘い 声 を 出 し 幸 男
若旦那あの鼻声をととも 好 き 路 郎

南海電鉄川柳会(大阪市)

辻 圭水報

抗議文受けとり慣れた顔で受け みなつき
抗議デモ主旨も判らず駆出され 武 進
ダンブカ、死の抗議にも平気なり 八 郎
妻の抗議里へ帰れるありがたさ 宏 子
子の抗議笑うだけではすまされず 貴 山
抗議文あっさり机にしまわれる 圭 水
戦後派は抗議することだけ憶え 和 郎
末っ子の抗議はママを味方にし 路 郎

杏林川柳会(大阪市)

中島生々庵報

殊歎ただ偶然と云っただけ 一 哲

急な客火鉢のスイツチ入れておけ 野迷路
童心を売りものにして笑わせる 一 伸
童心に親の 機嫌が反影し 五十六
童心の中にも怒はちよつとあり 小 石
童心に憎く写ったダンブカー 阿 茶
席ぬけて女将と話す長火鉢 諷 乃

333川柳会(堺市)

杉前南宗報

逢えばよく喋る男で筆不精 八 郎
用件を電話ですます筆不精 八 江子
筆不精の書珍品として残り 雄 声
筆不精履歴気になる面接日 千 鳥
筆不精口八丁でまるめとき 狂 二
痛さから痒さにかわる見合席 楓
しもやけの足にこたえる霜のみち 生 薑
とんとする声に子供は飛んで起き 新 石
火消壺持つてとんどへ仲間入り 南 宗
習慣は寝床のなかでめしを食い 雪 山
へボ将棋王の逃げ道先に あけ 務
逃げ道も知らず事務所隅に居り 一 楽

コケヨ川柳会(大阪市)

川口理休報

亡き妻の面影秘める孫で あり 柳 波
おつん基かない鼻で笑って通りすぎ 龜 心
おもかげに怒られそうな夜を過し 留 鈍
面影がまだ消え失せず嫁きおくれ 理 休

富柳会句会(富田林市)

阿部柳太報

優勝にライバルケチをつけたがり とも子
優勝の金まで税束見落さず 周 一
優勝旗今日校門がせま過ぎる 六童子

優勝馬その夜も同じ小舎にねる 柳 太
馬券買う窓口ひしめく顔ならばとみ 亥
窓口で言えぬ秘密に赤くなり 克 忠
窓口で小銭はたいて薬瓶 美 代
男親同士二代会飲みなおし 宏 子
男親に育ちこの娘は僕と云う 摩 天 郎
父親は味の素とは誰が言葉 柳 太
子の喧嘩負けてくるなと男親 柳 太
窓上げすぎて娘が売れのこり 吉 太 郎
窓口はじやまくさそうなつりを呉れ 静 林 庵
初当選地元の良い識で支えられ 八 郎
応援の甲斐なく地元また負ける 凡 太
代議士も国へかえれば丈吉ツアン 吞 天
地元もうだまされはせぬ票を入れ 尚 史
地元だと云う気安さがさきにあい 圭 水
地元ではただのおつさんだつたのに 路 郎

羽曳野句会(羽曳野市)

島田雄峰報

待つ身さえまた楽し初デート 紫
成人式亡父に見せたい晴姿 計 雄
子供の腫風呂敷包みに集中し うらら
ロカビリがムードに変わる成人達 春 生
見るだけでも早や風呂敷上げ出し 加 茂 女
寿の風呂敷さげた千鳥足 雄 峯
質屋さんふろしきだけはとりません 紅
およばれに風呂敷持参のなれた奴 蓮 太 呂
成人の顔代議士は票に見え 恵
成人を迎え変らぬドライぶり 千 草
交際のスタートだけは美しく 花 風
新婚のスタートあわい夢えがき 黄 昏
スタートはよごれ役だった名俳優 白 墨
スタートは一緒平も 重 役 も 三 角 坊
さあやろう成人達の意気高し 恵 生

真心を包んで居く小風呂敷 太 甫
成人と同時に恋も知りはじめ みどり
神様と医者にまかせた成人日 迷 句
風呂敷を拵げすぎたか属蘇気分 のん子
風呂敷につつまたい様な春の風 美 郎
風呂敷の月光仮面よく遊び つた子
スタートは豪華華にと願う 親 心 茂 男
成人の子の頼母しく水臭く 晴 嵐

丸紅飯田川柳部

川村好郎選

小心のためにいつでも片思い 一 世
小心のくせに大ホラ吹きたがる 星 斗
小心な世間が恋を妨害し 大 樹
小心は切手を貼ったかど気にした 美 幸
妻君にめんじてと言ひ貸してくれ 泉 睦
信用してるとしててもいはず 瓢 太
ボロ家もペンキ化粧で立ちなおり 北 斗
髪を梳く鏡の頬の綻んで 真 素
化粧なき十六七の愛らしさ 福 寿
パフのリズム今日のデートをかくし兼ね 立 兒
国賓へ舞台化粧のままで逢い 好 郎

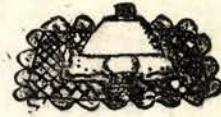
酌よし 千日前大劇裏
TEL②七二一〇
味よし アペノ橋近映地下
TEL⑦〇一四七

大 萬

★大万川柳(第百三十四回)を募る
兼題「へそくり」 路郎先生選
締切・四月十五日 五号以内
発表・四月廿日 (店内掲示)
投句先 阿倍野区松崎町三ノ〇
大万川柳会宛

梅里の店

柳樽室



路郎生

★各地から桜のたよりが頻りである。亡き豆秋の「降りる客いとものん」と続く「なり」が、ふとアタマをかすめて去る。いかにも春らしい句だが、近ごろの電車は降りても、人や車で渦巻いているので全くないのちがいである。

★前号は大変好評だった。富士野鞍馬氏の欠稿は、前号で報じたように、A2型の流感のために、締切りに間にあわなかったので待望されている方々にはお詫び申上げ。間もなく健康をとりもどされ、続稿が届いたので、ご放念を乞う。

★前号は一日発行が七日になった。こんなことは未だ曾てないことなので、待ちこがれていられる読者の方々に大変ご迷惑をかけた。これも印刷部の従業員数の過半数がA2型の流感で、どうにもならなかったのである。編集局はイライラするばかりだった。もうこんなことを繰り返さないように印刷部の方々の健康をひたすら祈

っている次第だ。全産ストで郵便の遅配やアルバイトの誤配や、台風のパツチリや、流感のための延刊と次ぎ次ぎにやってくる障害には編集局もホトホト閉口しているが、愛読者諸君の待ち望んでいられるのを思うと、どんなに苦しくても寝食を忘れて努力しているのでご寛恕が願いたい。

★蛇も穴を出るといふ春になったので、私もソロンソロ旅に出たい気でムズムズしている。昨夏、松山市を訪れてから、昨年中に、近畿地方の市を相当数出かけたが、それ等の記録まだまとめてはいない。何回か同じ市へ行き、書くだけの気持ち湧いたところから手をつけるつもりだ。

★私は前号で発表した「眠っている本を」の仕事は晩年の一大使命と観じ、六十余年を短詩界に生きて来た印として遺しておきたいと懸命に取組んでいる。この老短詩人の念願が少しでも早く実を結ぶように、ご支援をたまわりたいものである。

★K君（大阪市）から清水白柳先生の「入門講座」を毎号掲載して欲しいとの希望があった。編集局としても、それをのぞんでいるのであるが、何分担当者が非常に忙しいからだなので、担当者を隔月交替にでもして、ご希望に添いたいと配慮しているが、入門講座の講師となると句が巧いだけでは、

いけないし、この人と思っても大変忙しい方ではいけないし、その点、人選がむずかしいので目下交渉中なので、しばらくお待ちを願いたい。

▼ペンの散歩▲

▼花信しきり——柳信また楽し。四月号の出るころはガゼン柳界も活気づく。

▼各方面から路郎主幹にゼヒといふ、川柳大会などあるが、あまりムリをされることはどうかとおもう。前号で発表された「短詩文学文庫」の創設という大仕事もふえている今日である。

▼「花いっぱい」を特集した。誌上満開をもくろんだが、二、三氏の原因が切りやりにまにあわなかった。

▼富士野鞍馬氏のページが前号になかったから「さびしかった」というお便りももらった。執筆者にファンのあることは、編集局としても力強いことである。

▼今は交通戦争時代だといふ。そのギセイ者は老人にコドモが圧倒的に多いようだ。ハンドルをにぎる人は、老人やコドモを見たら赤いシグナルだと思っはしい。ボクが知っている川柳関係だけでもそのギセイ者は五指を越す。

▼川柳戦争というのはどうだろうか——柳社のナワ張り争いはこまらるが、句の上でドンとこいと、闘

志をまやして名句をアツ放してほしい。

▼観光客の酔漢戦争も花と共に咲くようだ。車内せましとパン声暴言には毎年憂うつである。ロレッツのまわらぬテアイを貨物車で運搬するようにすれば、若い婦人方もせまい車内を逃げまわらずにすむのだ。サテ、編集部の机上にはもう新緑の香りがする。(一三夫)

★四月句会——川雑支部

★淀川句会・5日(木)六時、題すし詰・無料・スタート、所、十三西之町五丁目東淀川郵便局、★明和研究句会・8日(日)一時、題、川・万能・木連・自由吟、所

阪神電車鳴尾駅東南二百米鳴尾公民館、★玉造句会・11日(水)七時、題、衣替え・弁当・色、所、市電玉造南百米大阪信用金庫、★米子句会・8日(日)一時半、題酔う・握る・倒れる、所、安来市乗相院(君枝屋)★にしなり句会・15日(日)六時、題、古都・入学・さくら、所、玉出新町通一ノ一一後藤梅志居、★南海電鉄句会・19日(木)六時半、題、ハンド・本音・重荷、所、難波高架下親和クラブ、★京都句会・16日(月)夕、題、中庭・浮気・匿名所、四条繩手仲源寺、★阿倍野句会・20日(金)七時、題、一筋・思い付き・切れ目・新学期、所、阿倍野区松崎町三ノ一〇割烹大万

麻生路郎先生著

川柳とは何か

——川柳の作り方と味わい方——

価二五〇円
送費七〇円

川柳はわれわれ庶民の偽らざる声である。絶叫・嘆息・嘆声・嗚咽——そうしたまろもろが十七音に圧搾された風刺と諧謔の短詩型、それは伝統的であると共に常に革新的である。その川柳がいかかにして発生し、経過し、今日に至り、将来に動くか、しかもその作り方は、味わい方は——以上を最も明快にわかりやすく、斯界の第一人者たる著者が答えているのが本書である。

取次所 川柳雑誌社

至文堂

東京都新宿区弘方町27 振替東京29507

あやめ池 驚異の世界博

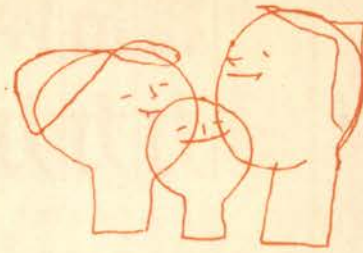
人気あつめて
ただ今開催中
6月11日まで



- 大自然や 科学をはじめ 世界のびっくりおどろき 不思議をあつめてくりひろげる驚異の博覧会
 - ことし初お目見え ショッキングホート 安全100% ショッキング100% アベックでどうぞ 20分100円
 - 松竹歌劇 春のおどり、15景 水上ジェットコースター 遊園地めぐり観光列車 動物園など たのしい施設いっぱいの大遊園地で1日たっぷりお遊び下さい
- 当日入場料 全部見られて150円こども80円
大阪上本町から奈良ゆき特急23分・急行30分
日・祝は特急も停車 あやめ池駅前が会場です

近鉄 あやめ池遊園地

一家そろつてホーライ党



廣東料理



大阪なんば・TEL(641)551-2

あなたの書架に
ぜひお備えを!!

竹柳製巻

麻生路郎 著

好評噴々

川柳の味わい方・五百数十句

価二五〇円 送費八〇円
上質B6版 二五〇余頁

川柳雑誌社

大阪市東区西成1-1-1
電話大阪(06)716-0081

東野大八著 流風 人間横丁

価二五〇円 送費七〇円
B6型 二五八頁

★異常な戦争にまき込まれ隻手となって帰還した著者のザックパランな人生批判が、その雄筆からはとばしるさまは凄しい。まるで腕の研えた板場の切れ味にも似ている。

★本稿は戦後十三年間、「川柳雑誌」に掲載され、好評、サクサクたりしものに補筆した雄編である。後半に川柳に関する卓見もあり、肩の凝らぬ読物としてお薦めしたい。

★ご送金は振替口座をご利用が便利で安全です。(切手代用可)

Printed in Japan

募 集

課題吟募集

片腕 (半角五頁) 浜田久米雄選
ちぐはぐ (半角五頁) 真鍋一瓢選
年がい (半角五頁) 中村九呂平選
(四月十五日締切)

あくび (半角五頁) 黒川紫香選
仮病 (半角五頁) 那谷光郎選
積木鉢 (半角五頁) 早川清生選
(五月十五日締切)

毎号募集

近作柳梅 (雑詩・短歌) 麻生路郎選
川柳塔 (雑詩・短歌) 北川春巢選
文章 (評論・研究・感想其他) 麻生路郎選
(毎月十五日締切)

投稿規定

- ▼ 投句は各種必ず別紙に認め、住所氏名雅号を明記する事。
- ▼ 「近作柳梅」は一般作家の雑吟を募集する。
- ▼ 「課題吟」は誰でも投句が出来る。川柳塔」の投句は不刊会員に限る。

川柳雑誌 第三十七号

定価 九〇円 (送料六円)
半年年 五七六円
一カ年 一〇八〇円

昭和三十七年三月廿五日印刷
昭和三十七年四月一日発行

大阪市西成区西成五丁目二番五号
川柳雑誌社 麻生路郎 代表

発行所 川柳雑誌社

電話大阪(06)716-0081
郵政口座大阪 七五〇五〇

水がアイロンかけをする

クラボウ

ベルファスト
セルフ・アイロン・コットン

技術提携先—米国D・ミリケン社
製造発売元—倉敷紡績株式会社



体力
活カ
力カ
精カ

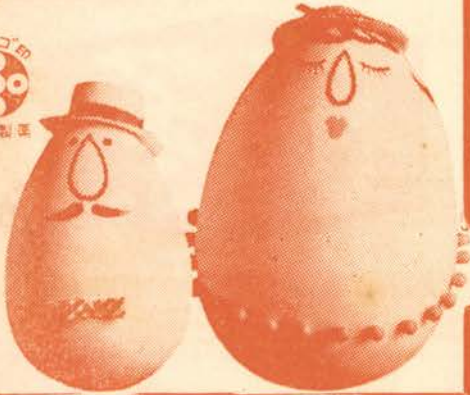
する新しい保健薬です。体力・活力
・精力を総合的に生み出し、お二人
の人生を健康で楽しくいたします。

体力・活力・精力

ヘルスロング

一五五
三〇〇
六六
七

三、一
〇六九
〇〇〇
四円



一番よい酒

うまい酒



菊正宗

清酒

宮内庁御用達
株式会社 本嘉納商店
神戸・灘・御影

昭和廿七年七月一日 第三種郵便物認可
昭和廿七年四月一日 発行(毎月一回一日発行)

編集 川柳雑誌社
三行印刷

発行者 川柳雑誌社

川柳雑誌社

〒650-1101 神戸市中央区南長崎通五丁目1番1号

電話 750505

定価 九十円 (送料別)